

日 高 市

や つ に た ん だ し も む か い や ま
谷津・二反田・下向山

首都圏中央連絡自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告

— I —

1993



二反田遺跡 6号住居跡出土土器



二反田遺跡 9号住居跡出土土器

序

首都圏の幹線道路は、産業の発展や自動車の増加に伴って、いまや飽和状態に近づきつつあり、わが埼玉県もその例外ではありません。そこで東京から各地へ放射状に伸びる高速道路を環状に連絡することによって慢性的な交通渋滞を緩和し、東京近郊の都市を相互に連絡して地域の活性化を促進するために計画されているのが、首都圏中央連絡自動車道、通称圏央道です。

圏央道は、まず埼玉県鶴ヶ島市から東京都青梅市までの区間で事業が着工されましたが、埼玉県内の建設予定地内には貴重な遺跡が多く存在しておりました。そこで、これら埋蔵文化財の取り扱いについては関係各機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、路線決定に当たってどうしても避けきれない遺跡については、日本道路公団の委託を受けて、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行うことになりました。

日高市は埼玉県南西部に位置し、高麗神社や聖天院などでも有名な歴史の古い地域で、埋蔵文化財も豊富なところとして知られています。日高市では9遺跡が該当し、発掘調査によって貴重な成果を得ることができました。本書はこのうち谷津遺跡・二反田遺跡・下向山遺跡の3遺跡の発掘調査報告書であります。ここでは旧石器時代から近世にかけての多くの資料が提供されましたが、とくに二反田遺跡では縄文時代中期の集落や、中世の鋳造関連遺構が検出されて多くの遺物が出土し、また下向山遺跡では中世以前の道路跡とみられる遺構が確認されたことが注目されます。本書が埋蔵文化財の保護に関する資料として、また学術研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書の刊行に至るまでご協力くださいました日本道路公団東京第二建設局、同川越工事事務所、日高市教育委員会、並びに地元関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井修二

例 言

- 1 本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

谷津遺跡	所在地	埼玉県日高市大字下大谷沢字谷津 3 6 1 他
Y T	文化庁指示通知	平成 2 年 9 月 11 日付委保第 5 - 557
二反田遺跡	所在地	埼玉県日高市大字下大谷沢字二反田 1 5 1 他
N T D	文化庁指示通知	平成 2 年 11 月 15 日付委保第 5 - 1254
下向山遺跡	所在地	埼玉県日高市大字大谷沢字下向山 6 9 2 他
S M M K	文化庁指示通知	平成 2 年 10 月 2 日付委保第 5 - 560

- 2 発掘調査は首都圏中央連絡自動車道の建設に伴うものであり、埼玉県教育局指導部文化財保護課が調整し、日本道路公団の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

- 3 発掘調査は第 1 次調査を昭和 63 年 12 月 9 日から平成元年 3 月 31 日まで、谷津遺跡を平成元年 7 月 1 日から 9 月 30 日まで、二反田遺跡を平成元年 10 月 1 日から平成 2 年 4 月 30 日まで、および平成 2 年 10 月 1 日から 12 月 30 日まで、下向山遺跡を平成元年 4 月 1 日から 12 月 30 日まで実施した。また報告書作成および編集作業は平成 4 年 4 月 1 日から平成 5 年 3 月 31 日まで実施した。

なお調査の組織は本文 2 ページに示した。

- 4 発掘調査は第 1 次調査を中島宏・宮昌之、谷津遺跡を田中正夫・岡本健一、二反田遺跡を栗島義明・田中正夫・岡本健一、下向山遺跡を中島宏・今井宏が担当した。

- 5 発掘調査時における遺構の写真撮影は各担当者が行い、遺物写真撮影は岡本があたった。巻頭カラー写真撮影は折原基久氏に委託した。

- 6 出土品の整理および図版の作成は岡本が担当し、植木智子の補助を受けた。なお第 10 図の石器実測は川口が、V-2-(1)の石器実測は西井が行なった。

- 7 本書の執筆は、I-1 を文化財保護課が、IV-2-(5)、3-(1) [遺物]、V-2-(6)を金子が、IV-3-(5)を赤熊が、他を岡本が担当した。

- 8 本書の編集は資料部資料整理第 1 課の岡本が行なった。

- 9 二反田遺跡塚の埋葬人骨の鑑定は富山薬科大学の森沢佐歳氏に、鉄滓等の分析は大澤正己氏に委託し、それぞれ玉稿をいただいた。

- 10 遺跡の基準点測量および航空写真撮影、写真測量は、味朝日航洋に委託した。

- 11 本書に掲載した資料は、平成 5 年以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

- 12 本書の作成にあたり、日高市教育委員会 中平薫氏、所沢市教育委員会 飯田充晴氏を始め、多くの方々からご教示・ご協力を賜った。

凡 例

- 1 X・Yによる座標表示は国家標準直角座標第Ⅱ系に基づく座標値を表し、方位はすべて座標北を示す。また遺構図は原則として上を北としている。
- 2 縮尺は原則として遺構配置図を1:400、遺構平面図・遺物出土状況図を1:60、炉・カマドなどの詳細図を1:30、縄文土器実測図を1:5、縄文土器拓影図を1:3、土師器・須恵器実測図を1:4、石器類を1:3、古銭拓影を1:1の縮尺で示し、その例外は挿図中に記した。
- 3 挿図中のスクリーントーン等の凡例は次のとおりである。
 - ・断面黒塗りの遺物実測図は須恵器を表す。
 - ・遺構実測図中の網かけは焼土の集中範囲を表す。
 - ・鋳造関連遺物実測図中、細かい網かけは溶解物の付着部分を、粗い網かけは還元面を表す。
 - ・その他のものについてはそれぞれ挿図中に凡例を付した。
- 4 遺物出土状況図のうち、●は土器の、▲は石器の出土位置を表す。
- 5 グリッドは、谷津遺跡・二反田遺跡では6mで、下向山遺跡では9mで設定した。
- 6 遺構の番号については整理作業の段階で改めた。遺構番号の新旧対照表を巻末に示した。遺構実測図や遺物の注記等はすべて旧番号で行なっている。

目 次

序

例 言

I 調査の概要	1
1 発掘調査に至るまでの経過	1
2 調査の経過	3
II 遺跡の立地と環境	4
III 谷津遺跡の調査	7
1 遺跡の概要	7
2 遺構と出土遺物	8
(1) 土坑	8
(2) 溝	12
(3) 出土遺物	16
IV 二反田遺跡の調査	18
1 遺跡の概要	18
2 I 区の調査	24
(1) 縄文時代の住居跡と遺物	24
(2) 平安時代の住居跡と遺物	84
(3) 土坑	88
(4) 溝	95
(5) グリッド出土の遺物	96
3 II 区の調査	109
(1) 縄文時代の住居跡と遺物	109
(2) 掘立柱建物跡	114
(3) 土坑	117
(4) 溝	122
(5) 鋳造関連の遺物	124
(6) グリッド出土の遺物	129
4 塚の調査	131
V 下向山遺跡の調査	135
1 遺跡の概要	135
2 遺構と出土遺物	140
(1) 旧石器時代の遺構と遺物	140
(2) 平安時代の住居跡と遺物	149

(3) 掘立柱建物跡	153
(4) 土坑・井戸・集石土坑	155
(5) 溝	161
(6) グリッド出土の遺物	171
VI 自然科学分析	177
1 埼玉県日高市二反田遺跡出土の人骨について	177
2 二反田遺跡出土銅造関連遺物の金属学的調査	182
VII 発掘調査の成果とまとめ	199

挿 図 目 次

第1図 周辺の地形と遺跡	5	第23図 3号住居跡出土遺物	29
谷津遺跡		第24図 3号住居跡出土遺物 (拓影)	29
第2図 谷津遺跡周辺の地形	7	第25図 4号住居跡	30
第3図 谷津遺跡のグリッド設定図と地形	7	第26図 4号住居跡出土遺物 (土器)	31
第4図 遺構全体図(1)	9	第27図 4号住居跡出土遺物 (拓影)	32
第5図 遺構全体図(2)	10	第28図 4号住居跡出土遺物 (石器)	33
第6図 土坑(1)	11	第29図 5号住居跡	34
第7図 土坑(2)	12	第30図 5号住居跡出土遺物 (拓影) (1)	35
第8図 溝(1)	14	第31図 5号住居跡出土遺物 (拓影) (2)	36
第9図 溝(2)	15	第32図 5号住居跡出土遺物 (石器)	36
第10図 出土遺物	17	第33図 6号住居跡	38
二反田遺跡		第34図 6号住居跡遺物出土状況	39
第11図 二反田遺跡周辺の地形	19	第35図 6号住居跡出土遺物 (土器)	40
第12図 グリッド設定図と地形および 基本土層	20	第36図 6号住居跡出土遺物 (土製品)	41
第13図 I区遺構全体図(1)	21	第37図 6号住居跡出土遺物 (拓影)	42
第14図 I区遺構全体図(2)	22	第38図 6号住居跡出土遺物 (石器) (1)	43
第15図 I区遺構全体図(3)	23	第39図 6号住居跡出土遺物 (石器) (2)	44
第16図 1号住居跡	24	第40図 7号住居跡	45
第17図 1号住居跡出土遺物	25	第41図 7号住居跡遺物出土状況	46
第18図 2号住居跡	25	第42図 7号住居跡出土遺物 (土器)	47
第19図 2号住居跡出土遺物 (土器)	26	第43図 7号住居跡出土遺物 (拓影) (1)	48
第20図 2号住居跡出土遺物 (拓影)	26	第44図 7号住居跡出土遺物 (拓影) (2)	49
第21図 2号住居跡出土遺物 (石器)	26	第45図 7号住居跡出土遺物 (石器)	49
第22図 3号住居跡	28	第46図 8号住居跡	51
		第47図 8号住居跡遺物出土状況	52

第48図	8号住居跡出土遺物(土器)(1).....53	第84図	14号住居跡.....85
第49図	8号住居跡出土遺物(土器)(2).....54	第85図	14号住居跡遺物出土状況.....86
第50図	8号住居跡出土遺物(拓影)(1).....55	第86図	14号住居跡出土遺物.....86
第51図	8号住居跡出土遺物(拓影)(2).....56	第87図	15号住居跡.....87
第52図	8号住居跡出土遺物(拓影)(3).....57	第88図	15号住居跡出土遺物.....88
第53図	8号住居跡出土遺物(石器).....57	第89図	I区土坑(1).....89
第54図	9号住居跡.....59	第90図	I区土坑(2).....90
第55図	9号住居跡遺物出土状況.....60	第91図	I区土坑(3).....91
第56図	9号住居跡出土遺物(土器)(1).....62	第92図	集石土坑.....92
第57図	9号住居跡出土遺物(土器)(2).....63	第93図	土坑遺物出土状況.....93
第58図	9号住居跡出土遺物(土器)(3).....64	第94図	土坑出土遺物(土器).....93
第59図	9号住居跡出土遺物(拓影)(1).....65	第95図	土偶.....93
第60図	9号住居跡出土遺物(拓影)(2).....66	第96図	土坑出土遺物(石器).....93
第61図	9号住居跡出土遺物(拓影)(3).....67	第97図	土坑出土遺物(拓影).....94
第62図	9号住居跡出土遺物(石器)(1).....68	第98図	I区溝.....96
第63図	9号住居跡出土遺物(石器)(2).....69	第99図	グリッド出土遺物(土器).....97
第64図	10号住居跡.....70	第100図	グリッド出土遺物(拓影)(1).....99
第65図	10号住居跡遺物出土状況.....71	第101図	グリッド出土遺物(拓影)(2).....100
第66図	10号住居跡出土遺物(土器).....71	第102図	グリッド出土遺物(拓影)(3).....101
第67図	10号住居跡出土遺物(拓影).....72	第103図	グリッド出土遺物(拓影)(4).....102
第68図	10号住居跡出土遺物(石器).....73	第104図	グリッド出土遺物(拓影)(5).....103
第69図	11号住居跡.....74	第105図	グリッド出土遺物(拓影)(6).....104
第70図	11号住居跡遺物出土状況.....75	第106図	グリッド出土遺物(石器)(1).....105
第71図	11号住居跡出土遺物(土器).....75	第107図	グリッド出土遺物(石器)(2).....106
第72図	11号住居跡出土遺物(拓影).....76	第108図	グリッド出土遺物(石器)(3).....107
第73図	11号住居跡出土遺物(石器).....77	第109図	II区遺構全体図(1).....109
第74図	12号住居跡.....78	第110図	II区遺構全体図(2).....110
第75図	12号住居跡出土遺物(土器).....78	第111図	16号住居跡.....111
第76図	12号住居跡出土遺物(拓影).....79	第112図	16号住居跡遺物出土状況.....112
第77図	12号住居跡出土遺物(石器).....80	第113図	16号住居跡出土遺物(石器).....112
第78図	13号住居跡.....81	第114図	16号住居跡出土遺物(拓影).....113
第79図	13号住居跡遺物出土状況.....82	第115図	1・2・3号建物跡.....114
第80図	13号住居跡出土遺物(土器).....82	第116図	1・2・3号建物跡柱穴断面.....115
第81図	13号住居跡出土遺物(拓影).....83	第117図	4号建物跡.....117
第82図	13号住居跡出土遺物(石器).....83	第118図	II区土坑(1).....118
第83図	住居跡ピットの深さ.....84	第119図	II区土坑(2).....119

第120図	Ⅱ区土坑(3).....	120
第121図	63号土坑.....	120
第122図	土坑出土遺物(1).....	120
第123図	土坑出土遺物(2).....	121
第124図	Ⅱ区溝.....	123
第125図	鋳造関連遺物の出土比率.....	126
第126図	鋳造関連遺物.....	127
第127図	鉄製品・鉄塊.....	128
第128図	溶解炉.....	128
第129図	羽口の推定口径.....	129
第130図	Ⅱ区グリッド出土遺物(1).....	130
第131図	Ⅱ区グリッド出土遺物(2).....	130
第132図	Ⅱ区グリッド出土遺物(石器).....	130
第133図	塚調査前測量図.....	131
第134図	塚断面.....	131
第135図	封土除去状況と墓嚢.....	132
第136図	塚出土遺物.....	133
第137図	塚出土古銭.....	134
下向山遺跡		
第138図	下向山遺跡周辺の地形.....	135
第139図	グリッド設定図と地形および 基本土層.....	136
第140図	遺跡全体図(1).....	137
第141図	遺跡全体図(2).....	138
第142図	遺跡全体図(3).....	139
第143図	旧石器試掘グリッドと分布図凡例.....	140
第144図	第Ⅰ期石器分布図.....	141
第145図	石器実測図(1).....	141
第146図	第Ⅱ期石器分布図.....	142
第147図	石器実測図(2).....	143
第148図	第Ⅲ期石器分布図.....	144
第149図	石器実測図(3).....	145
第150図	礫群分布図.....	146

第151図	1号住居跡.....	149
第152図	1号住居跡カマド.....	150
第153図	1号住居跡遺物出土状況.....	150
第154図	1号住居跡出土遺物.....	151
第155図	2号住居跡.....	152
第156図	2号住居跡遺物出土状況.....	153
第157図	2号住居跡出土遺物.....	153
第158図	1号建物跡.....	154
第159図	2号建物跡.....	154
第160図	土坑(1).....	156
第161図	土坑(2).....	157
第162図	井戸.....	158
第163図	集石土坑.....	159
第164図	土坑・溝出土遺物.....	160
第165図	溝(1).....	162
第166図	溝(2).....	163
第167図	11号溝.....	164
第168図	13・14・15号溝(1).....	166
第169図	13・14・15号溝(2).....	167
第170図	13・14・15号溝(3).....	168
第171図	13・14・15号溝横断面.....	169
第172図	13・14号溝硬化面.....	169
第173図	21号溝.....	170
第174図	21号溝硬化面.....	171
第175図	古銭(1).....	172
第176図	古銭(2).....	173
第177図	古銭(3).....	174
第178図	グリッド出土遺物(拓影).....	175
第179図	グリッド出土遺物(石器)(1).....	176
第180図	グリッド出土遺物(石器)(2).....	176
第181図	塚出土人骨.....	180
第182図	二反田遺跡縄文時代中期 住居跡の変遷.....	200

表 目 次

第1表	谷津遺跡土坑一覧……………13	第16表	NTND-1 中砂鉄粒子の 高速定性分析結果……………195
第2表	谷津遺跡石器計測表……………17	第17表	NTND-3 スラグの 高速定性分析結果……………196
第3表	二反田遺跡Ⅰ区土坑一覧……………92	第18表	NTND-3 スラグ中ファイヤライト 晶出部の高速定性分析結果……………196
第4表	二反田遺跡Ⅰ区石器計測表……………108	第19表	NTND-3 中錆化鉄の 高速定性分析結果……………197
第5表	二反田遺跡Ⅱ区土坑一覧……………121	第20表	NTND-7 中微小ファイヤライトの 高速定性分析結果……………197
第6表	鑄造関連遺物遺構別計量表……………125	第21表	NTND-7 中マグネタイトの 高速定性分析結果……………198
第7表	二反田遺跡Ⅱ区石器計測表……………130	第22表	NTND-13中不完全球状黒鉛の 高速定性分析結果……………198
第8表	旧石器時代出土遺物一覧(1)……………147		
第9表	旧石器時代出土遺物一覧(2)……………148		
第10表	下向山遺跡土坑一覧……………157		
第11表	下向山遺跡石器計測表……………176		
第12表	二反田遺跡人骨の計測値・示数……………181		
第13表	供試材の履歴と調査項目……………183		
第14表	化学組成……………194		
第15表	NTND-1 の高速定性分析結果……………195		

図 版 目 次

図版1	谷津遺跡全景	図版16	14・15号住居跡、1～5号土坑
図版2	調査区全景、2・4・5・6号土坑	図版17	9～17号土坑
図版3	9・11～15・17・18号土坑	図版18	18・20～24・26・27・29号土坑
図版4	19・20～24・26・29号土坑	図版19	29・31～33・35・37・38号土坑
図版5	30～33号土坑、2～4・6・7号溝	図版20	39・41号土坑、1～4号溝、 1～3号集石土坑
図版6	7～10号溝	図版21	2～4・6号住居跡出土遺物
図版7	谷津遺跡出土遺物	図版22	6号住居跡出土遺物
図版8	二反田遺跡全景	図版23	6・7号住居跡出土遺物
図版9	二反田遺跡Ⅰ区全景	図版24	8号住居跡出土遺物
図版10	Ⅰ区住居群、1・2号住居跡	図版25	8・9号住居跡出土遺物
図版11	4～6号住居跡	図版26	9号住居跡出土遺物
図版12	7・8号住居跡	図版27	9号住居跡出土遺物
図版13	9・10号住居跡	図版28	9号住居跡出土遺物
図版14	10・11号住居跡	図版29	9～11号住居跡出土遺物
図版15	12～14号住居跡		

図版30 11～13号住居跡出土遺物
図版31 14・15号住居跡出土遺物
図版32 15号住居跡、24・29～31号土坑、
グリッド出土遺物
図版33 グリッド出土土器
図版34 1～4号住居跡出土土器
図版35 5・6号住居跡出土土器
図版36 6～8号住居跡出土土器
図版37 9・10号住居跡出土土器
図版38 11～13号住居跡、土坑、
グリッド出土土器
図版39 グリッド出土土器
図版40 グリッド出土土器
図版41 二反田遺跡区Ⅱ区全景
図版42 Ⅱ区全景、16号住居跡
図版43 掘立柱建物跡柱穴群、46・48号土坑
図版44 50～52・54～56・58・59・61～63号土坑
図版45 73号土坑、8～10号溝
図版46 16号住居跡、45・63・70号土坑、
グリッド出土遺物
図版47 16号住居跡、グリッド出土土器、
溶解炉
図版48 塚、人骨出土状況、塚出土遺物
図版49 塚出土古銭
図版50 下向山遺跡全景
図版51 調査前風景、旧石器時代遺物出土状況
図版52 調査区全景、1・2号住居跡
図版53 1号建物跡、柱穴群、1～6号土坑

図版54 7～11・13～16号土坑
図版55 17～19・21・23号土坑、12号井戸
図版56 3～5号井戸、1・3号集石土坑、
2・3・6・9号溝
図版57 10・11・17～20・23・24・26号溝
図版58 11・13～15号溝
図版59 15・21号溝
図版60 旧石器時代遺物、12号住居跡出土遺物
図版61 土坑・溝出土土器
図版62 古銭
図版63 古銭
図版64 古銭
図版65 グリッド出土土器
図版66 グリッド出土土器、二反田塚出土人骨
図版67 鋳造関連遺物の顕微鏡組織
図版68 鋳造関連遺物の顕微鏡組織
図版69 鋳造関連遺物の顕微鏡組織
図版70 鋳造関連遺物の顕微鏡組織
図版71 鋳造関連遺物の顕微鏡組織
図版72 鋳造関連遺物の顕微鏡組織
図版73 鋳造関連遺物の特性X線像
図版74 鋳造関連遺物の特性X線像
図版75 鋳造関連遺物の特性X線像
図版76 鋳造関連遺物の特性X線像
図版77 鋳造関連遺物の特性X線像
図版78 鋳造関連遺物の特性X線像
図版79 鋳造関連遺物の特性X線像
図版80 鋳造関連遺物の特性X線像

I 調査の概要

1 発掘調査に至るまでの経過

首都圏中央連絡自動車道は、東京都心から40～50km圏に位置する中核都市を相互に連絡するとともに、首都圏から放射状にのびる各高速道路（東名、中央、関越、東北、常磐、東関東）を連結し、地域間の交通の円滑化及び土地利用の適正な誘導を図り、諸都市の健全な発達を促進させる役割を果たすことを目的とし計画された。埼玉県としても積極的に本事業の推進を図ってきたところである。県内では入間市の都県境から関越自動車道鶴ヶ島ジャンクションまでの延長19.8kmで事業が進められてきた。

当事業にかかる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、昭和62年10月9日に文化財保護課、埋蔵文化財調査事業団、関係各市町教育委員会、道路公団担当者でもった協議をはじめとして、事業の進捗状況に応じて関係者間で協議を重ねたところである。

昭和63年9月26日付け東二建総管第117号で日高市及び入間市金子地区について、平成元年8月1日付け東二建総管第157号で狭山市笹井地区について、平成2年10月29日付け東二建総管第219号で鶴ヶ島市及び入間市小谷田地区について日本道路公団東京第二建設局長から埼玉県教育委員会教育長あて埋蔵文化財包蔵地について照会があった。

文化財保護課では照会地について分布調査、埋蔵文化財所在確認調査を実施し、その結果に基づいて、昭和63年12月2日付け教文第806号、平成2年2月14日付け教文第1470号及び平成2年11月29日付け教文第1000号で次の埋蔵文化財包蔵地の所在等について回答した。

所在地	遺 跡 名
入 間 市	西武蔵野・東武蔵野・十文字原・青梅道南・丸山・坂東山・坂東山西・森坂
狭 山 市	八木前・八木・八木上・沢口上・宮地・金井上・西久保・東久保
日 高 市	向原・上原・向山・下向山・二反田・谷津
鶴ヶ島市	後A・後B・道上・久保

上記の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、事業の計画変更が不可能と判断されたので、記録保存の処置を講ずることとし、発掘調査の実施について道路公団、文化財保護課、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団とで協議した。その結果、昭和63年12月9日から平成元年3月31日まで日高市内の6遺跡について第1次調査を実施することとなった。この成果により、平成元年度に谷津、二反田、下向山、上原、西武蔵野遺跡の発掘調査を行った。谷津、二反田、下向山遺跡の調査届に関する文化庁長官からの指示通知はそれぞれ平成2年9月11日付け委保第5の557号、同年9月21日付け委保第5の596号、同年10月2日付け委保第5の560号である。(文化財保護課)

発掘調査の組織

1 第1次調査（昭和63年度）

理 事 長	長井五郎
副 理 事 長	百瀬陽二
常務理事兼 調査研究部長	早川智明
理 事 兼 管理部長	原田家次
庶務経理	
管 理 課 長	関野栄一
主 事	江田和美
主 事	岡野美智子
主 事	本庄朗人
主 事	斉藤勝秀

発掘調査

調査研究部	
副 部 長	塩野 博
第 2 課 長	昼間孝次
主任調査員	中島 宏
主任調査員	宮 昌之

2 発掘調査（平成元年度）

理 事 長	荒井修二
副 理 事 長	百瀬陽二
常務理事兼 管理部長	古市芳之
理 事 兼 調査研究部長	吉川國男

庶務経理

管 理 課 長	関野栄一
主 事	江田和美
主 事	岡野美智子
主 事	本庄朗人
主 事	斉藤勝秀

発掘調査

調査研究部	
副 部 長	塩野 博
第 2 課 長	昼間孝次
(下向山遺跡)	
主任調査員	中島 宏
主任調査員	今井 宏
(谷津・二反田遺跡)	

調 査 員	田中正夫
調 査 員	岡本健一

3 発掘調査（平成2年度）

理 事 長	荒井修二
副 理 事 長	早川智明
常務理事兼 管理部長	古市芳之
理 事 兼 調査部長	吉川國男

庶務経理

庶 務 課 長	高田弘義
主 査	松本 晋
主 事	長滝美智子
経 理 課 長	関野栄一
主 任	江田和美
主 事	本庄朗人
主 事	斉藤勝秀

発掘調査

調査部副部長	塩野 博
第 2 課 長	昼間孝次
(二反田遺跡)	
主任調査員	栗島義明
調 査 員	岡本健一

4 報告書作成（平成4年度）

理 事 長	荒井修二
副 理 事 長	早川智明
常務理事兼 管理部長	倉持悦夫
理 事 兼 調査部長	栗原文蔵

庶務経理

庶 務 課 長	萩原和夫
主 査	賛田 清
主 事	菊地 久
経 理 課 長	関野栄一
主 任	江田和美
主 事	長滝美智子
主 事	福田明美
主 事	腰塚雄二

整理事業

資 料 部 長	中島利治
資料部副部長兼 資料整理第1課長	増田逸朗
調 査 員	岡本健一

2 調査の経過

〔第1次調査〕

首都圏中央連絡自動車道（以下圏央道と略す）事業地内の遺跡の状況を把握し、本調査のための詳細な資料を得るため、昭和63年12月9日から平成元年3月31日まで日高市地区の第1次調査を行った。下向山遺跡では起工式のための進入路を設置するため一部本調査を行い、平安時代の住居跡1軒等を検出し、鎌倉街道関係の遺構が推定された。

〔谷津遺跡〕

谷津遺跡は平成元年7月1日から9月30日まで調査を行なった。調査区の東・南側は谷になり、当初より調査区域外であった。また調査区北側の台地上部も第1次調査によって遺構のないことが確認されており、調査範囲とはなっていない。廃土をこの台地上部に押しながら、表土掘削・遺構精査を行なって、近世の溝10条や土坑34基等を検出した。遺物は縄文前期から近世におよぶが、表土掘削が多く遺構からはほとんど出土していない。9月に航空撮影を行なって調査を終了した。

〔二反田遺跡〕

遺跡内を南北に分断する大きな谷を境に、北をⅠ区、南をⅡ区として調査した。

まず平成元年10月1日からは廃土置場の関係から、Ⅰ区の北半分のみを表土掘削して精査を行なった。遺構は土坑が18基ほどで、遺物もほとんどなかった。12月からⅠ区南半分の掘削を開始したところ、掘削土の中から多数の土器片が出土したため、かなり多くの土量を人力で掘削して遺構精査に至った。縄文中期の住居跡13軒・平安時代住居跡2軒・土坑23基などを検出した。ほぼ年度内に遺構の検出や航空撮影・測量は終わり、平成2年度には最終的な測量や写真撮影を4月30日まで継続して、Ⅰ区の調査は終了した。航空測量では1/200の遺構図を作成した。

Ⅱ区の北半分については平成元年度中に表土掘削や遺構精査・掘削を行い、2年度の10月1日より調査を再開した。またⅡ区南半分は2年度10月1日から表土掘削、遺構精査を行なって、Ⅱ区では縄文前期住居跡1軒・掘立柱建物跡4棟等を検出し、12月に航空撮影・測量を実施して、12月30日に調査を終了した。

塚は平成元年度に調査した。表土掘削からすべて人力で行なった。埋葬されていた人骨は富山薬科大学の森沢佐蔵氏に分析を依頼した。

〔下向山遺跡〕

平成元年の4月1日より県道西側の調査区から調査を開始し、中世鎌倉街道と関連すると想定される溝が検出され注目された。その調査区は9月に航空撮影を行なった。9月には当遺跡の西に隣接する向山遺跡の最東端部分を工事の工程上、調査を先行し、その後県道東側の調査区にかかり、区画状の溝や平安時代の住居跡1軒、掘立柱建物跡が確認された。12月に航空撮影を行なって、調査を終了した。

〔整理作業・報告書作成〕

圏央道事業関連の遺跡調査の最初の報告書として、平成4年4月1日から5年3月31日まで整理作業と報告書作成を行なった。他の遺跡も順次刊行される予定である。

II 遺跡の立地と環境

圏央道は日高市の東部、川越市・狹山市・飯能市との境に近いところをほぼ南北に貫通し、北は川越市をかすめて鶴ヶ島市へ、南は狹山市を経て入間川を渡り入間市へのびる。本書で報告する3遺跡の地番は次の通りである。

谷津遺跡 日高市大字下大谷沢字谷津361他 (第1図-A)

二反田遺跡 日高市大字下大谷沢字二反田151他 (B)

下向山遺跡 日高市大字大谷沢字下向山692他 (C)

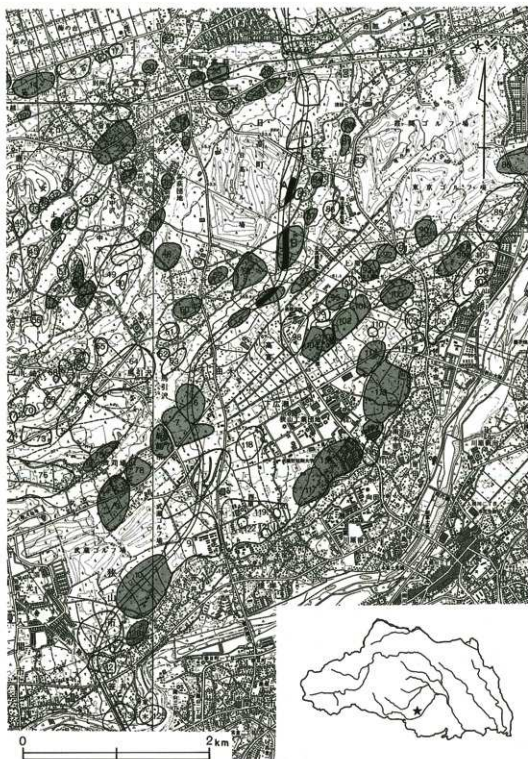
これらの遺跡は入間川の左岸の入間台地上に立地しているが、入間台地はとくにこの日高市東部地域では、いくつかの小河川によって開析された小さな谷地形が形成され、遺跡の分布も豊富なところである。3遺跡はいずれも南小畔川による開析谷に面している。南小畔川は宮沢湖を水源として東流し、笠幡地区で小畔川と合流して入間川に流れ込む。

日高市周辺の圏央道事業地内の遺跡を北から概観すると、日高市に隣接する川越市光山遺跡(第1図-15)では奈良時代(8世紀中ごろ)の住居跡26軒、掘立柱建物跡20棟などが検出され、とくに奈良時代の大型住居の存在や、墨書土器・佐波里模倣碗などの出土から、高麗郡建郡との関連性が指摘されている。それに隣接する上猿ヶ谷戸遺跡(14)でも同時期の住居跡11軒、掘立柱建物跡16棟など、光山遺跡と同様の状況がみられ、住居内から出土した馬具の轡や、漆の付着した土器が注目される。小畔川をはさんだ南側丘陵部部の長山甲遺跡(13)では、落し穴やフラスコ状貯蔵穴を含む縄文時代の土坑群が、その南に隣接する西ノ久保遺跡(12)では縄文時代の土坑群や、旧石器時代ナイフやフレイク類が出土した。

下向山遺跡の東に隣接する向山遺跡(4)では南小畔川に面する緩やかな斜面で、縄文時代早期の押型文土器を中心とする住居跡6軒が検出され、その希少性が注目される。他に縄文時代中期の住居跡1軒なども確認された。上原遺跡(5)では縄文時代中期(勝坂～加曾利E期)の住居跡が6軒、竪穴状遺構が9基検出された。向原遺跡(6)では旧石器時代の石器集中区をはじめ、縄文時代早期の炉穴群や中期(加曾利E期)の住居跡2軒、平安時代(10世紀)の土坑1基などが検出された。南に隣接して存在する狹山市西久保遺跡(7)では旧石器時代の石器集中区9ヶ所、平安時代(9世紀～10世紀初頭)の竪穴式住居跡12軒、掘立柱建物跡5棟などが検出された。(以上調査時現在の概数)

その他周辺の遺跡を概観してみたい。遺跡の時期は縄文中期と奈良・平安時代のものが圧倒的に多く、当遺跡でもこの時期を中心とした遺構が検出されているので、ここでは縄文時代中期と奈良・平安時代を主に概観する。

縄文時代中期の遺跡は非常に多く、開析谷に面する丘陵斜面には遺跡が密集している。しかしこれらは遺物が散布していることから遺跡と確認されているのみで、調査された遺跡は少ない。集落が確認された遺跡は、日高市宿東(29)、狹山市丸山(90)、森ノ上(114)、宮地(10)、飯能市芦刈場(77)などの各遺跡である。宿東遺跡では、当二反田遺跡とほぼ同時期の加曾利E式期の住居跡が4軒検出され、丸山遺跡では勝坂～加曾利E式期の竪穴式住居跡11軒や土坑が検出されている。また



第1図 周辺の地形と遺跡（アミかけは縄文中期の遺跡）

森ノ上遺跡や宮地遺跡では中期終わりの数石住居跡があり、また芦刈場遺跡では阿玉台、勝坂期の竪穴式住居跡8軒が検出されている。このように縄文中期集落の検出例が決して多くはない地域であったので、今回の圏央道関連の調査によって、二反田・向山・上原・向原の各遺跡において、中期（加曽利E式期）の住居跡が検出されたことは、この地域の縄文時代研究に多くの資料を提供することとなった。

奈良・平安時代の遺跡も周辺では多く存在する。とくに入間川左岸段丘上と小畔川流域で顕著に分布する。入間川左岸では宮ノ越(89)、城ノ越(105)、小山ノ上(111)、森ノ上(114)、今宿(116)などが大規模で、南小畔川流域では飯能市張摩久保遺跡(76)や、下向山遺跡のちょうど対岸に当たる日高市宮久保遺跡(58)でこの時期の住居跡が調査された。女影庵寺を中心とする小畔川流域でも遺構が明確なものは少ないが、この時期の遺跡が多く分布する。奈良時代は高麗郡がつくられた時期であり、高麗氏をはじめとする多くの人々が入植するのを契機として、現在のところ古墳時代の遺構や遺物がほとんどないこの地域に、奈良・平安時代にわたって多くの集落が営まれるようになったようである。

中世以降については遺跡が少ないので明らかではないが、入間川左岸の多くの遺跡では鉄滓等の製鉄あるいは鑄造関係の遺物が多く採集されており、二反田遺跡では中世にさかのぼる鑄造関連遺物が出土している。近世には「柏原鋳物師」がいたことがわかっており、今後具体的な遺構が検出されれば、その実態も明らかになるであろう。

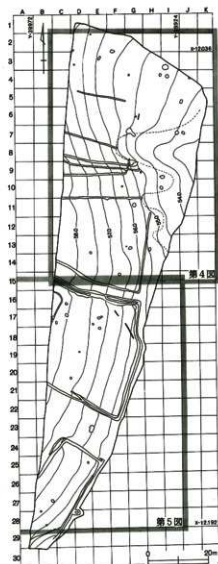
また今回の調査でも注目されるものとして、鎌倉街道上道の推定路がある。鎌倉街道は関東諸国から鎌倉へ馳せ参ずる際のいわば官道的な性格の道路であるが、それ以前からあった道を利用したと推定されている。下向山遺跡ではこの鎌倉街道の推定路が横断しており、調査でも道路跡と考えられる遺構が検出された。鎌倉街道からはやや南にはずれてはいるが、日高市向谷遺跡(57)では同様の遺構（硬化面下にピットがならんで検出される）が確認され、時期は9世紀くらいの道路遺構と考えられており、下向山遺跡との関連が注目される。この鎌倉街道は武蔵野の丘陵地に点々とその風情を今に残しているが、宅地化の波は当然のごとくこの地域にも押し寄せ、次第に変貌しつつある。

Ⅲ 谷津遺跡の調査

1 遺跡の概要



第2図 谷津遺跡周辺の地形



第3図 谷津遺跡のグリッド設定図と地形

谷津遺跡は日高カントリークラブのすぐ東に隣接する台地斜面上に位置している。地形は南小畔川から分かれた小さな水路によって開析された、文字どおりの谷津地形に面している。標高は調査区の西側では約58.5m、東側では約53.5mとほぼ5mの比高差があり、なだらかな斜面を成している。調査区の北側と南側には谷が入りこんでおり、また調査区内にもごく小さな谷があって、調査中もその谷からは常に水がにじみ出ている。

遺構は土坑が34基、溝が10条であった。土坑は調査区内に散在しており、井戸状のものも3基ほど確認されたが、ほとんどの土坑からは遺物が出土しなかったため、その時期や性格を究明することはできなかった。溝は斜面にそって規則的に方形に巡るものが多く、土地を区画する機能があったことが想定される。

遺物はあまり多くないが、溝からは中・近世の陶磁器片が、土坑からは古銭が出土し、第1次調査や表土掘削時に縄文時代前・中期の土器片などを採集した。調査区内に数ヶ所、旧石器試掘トレンチを設定したが、いずれも遺物は出土しなかった。

調査区北側の谷を隔てた台地上では、第1次調査によって遺構が検出されなかった。遺跡の中心はおそらくカントリークラブのある台地上ではないかと思われる。

2 遺構と出土遺物

(1) 土坑

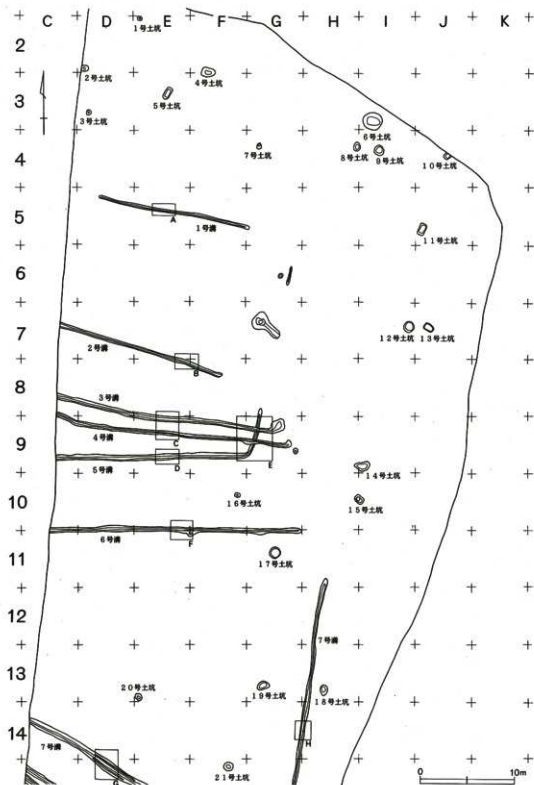
土坑は全部で34基検出されたが、各データーは第1表に示しておいた。土坑はその形状によって分類が可能である。

①平面が円形で深い井戸状のもの、②平面が小型のもの、③平面長方形で壁面が直に下りるもの、④楕円形または不整形で比較的浅いものにおおよそ分けられる。

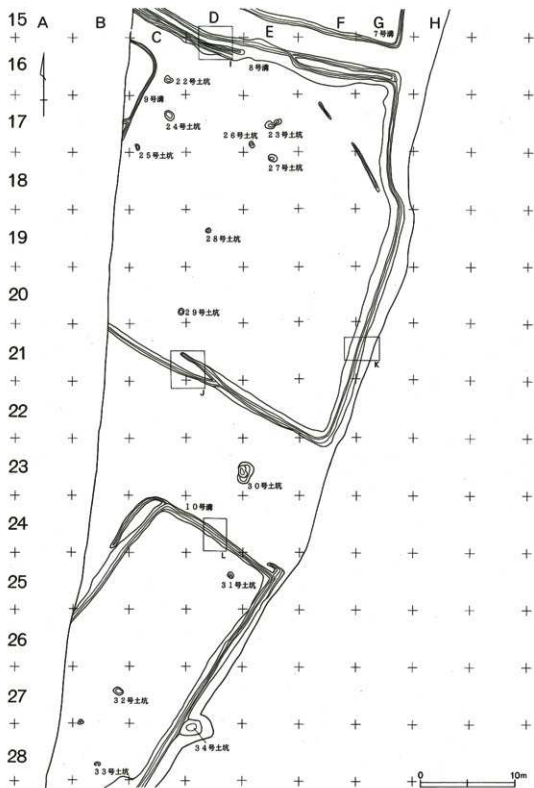
①の中では6号土坑が径約2mで深さが約1.2mともっとも規模が大きい。底面からはすでに水が湧きだしており、井戸の機能は十分に果たしたであろう。断面からは自然に土が堆積していった状況が観察できた。また12号土坑では湧水レベルが高く、底面まで検出することを断念した。35号土坑も平面は不整形で、壁面もなだらかな状況ではあるが、機能的には井戸の役目を果たしたと考える。②の平面が小型のものは2号土坑のように深さ約60cmのものから、28号土坑のように深さ約10cmのものまで規則性がなく、その機能も不明である。

③の形状のものは5・11・13号土坑があげられる。いずれもその平面形が縦1.0～1.2m、横0.5～0.6mにおさまリ、深さもいずれも約20cmほどである。壁面も長壁は垂直に近く、短壁はそれに比べ緩やかである。このようにある程度の企画性が読み取れる。これは覆土が黒褐色の締まりの悪い土であることから、近世以降の耕作に伴うものではないかと推定される。

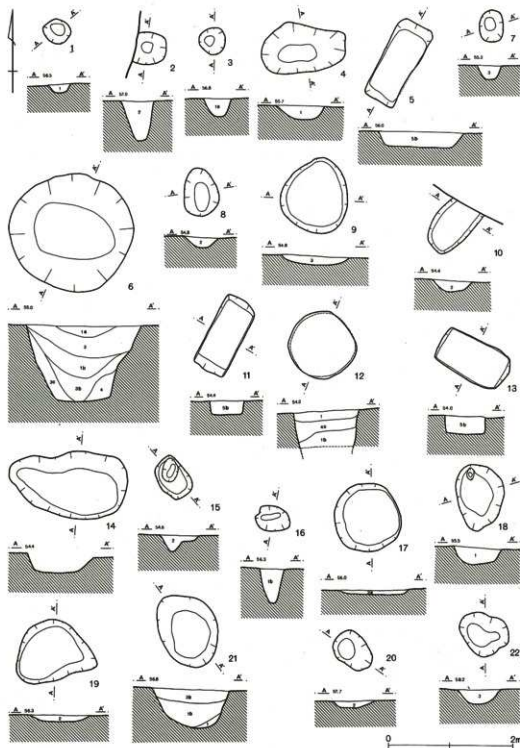
④ではやや円形に近い17号土坑で覆土中から古銭が出土した。非常に脆弱な状況であったが、調査時の所見では「開元通宝」と読めた。中世に遡る土坑である可能性もある。また19号土坑の覆土中からは縄文時代前期諸磯式の土器片が出土したが、土坑自体に伴うものではないと考えられる。遺物が出土した土坑はこの2基である。



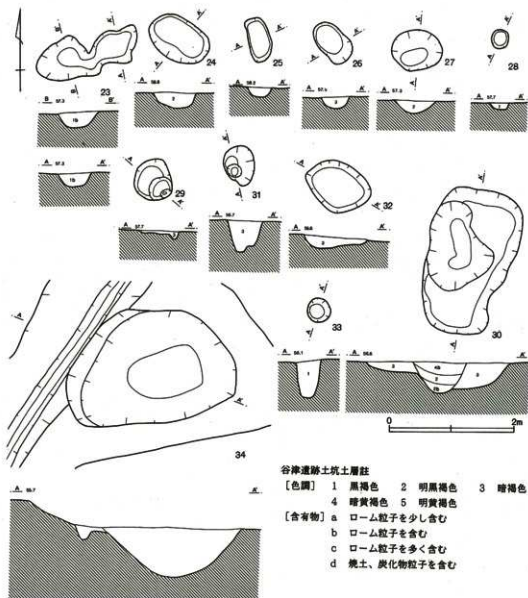
第4図 遺構全体図(1)



第5図 遺構全体図(2)



第6圖 土坑(1)



第7図 土坑 (2)

(2) 溝

溝は10条検出された。いずれも直線または「コ」字状に巡るもので、すべて調査区西側から伸びているので全体の形態は不明であるが、おそらく方形の土地区画のための機能があったものと考えられる。時期は不詳であるが、2号溝から天目碗の破片が出土していることを勘案すると、おそらく中近世のものと考えられる。またどの溝も土層断面の観察によると水などが流れていた痕跡はみられず、いっぺんに埋没した（または埋められた）ようである。

1号溝（第8図-A）は等高線に直交して東西に走る、深さ10cmほどの浅い溝であるが、元来は後述する5号溝とともに方形に巡っていたとみられる。それは1号溝の東側にわずかに残る、等高

第1表 谷津遺跡土坑一覧

坑	位置	形状	縦 m	横 m	深 m	坑	位置	形状	縦 m	横 m	深 m
1	E-2	楕円形	0.46	0.38	14	18	H-13	不整形	1.08	0.76	28
2	D-2	楕円形	0.5~	0.50	62	19	G-13	不整形	1.30	0.96	10
3	D-3	円形	0.44	0.42	28	20	E-13-14	楕円形	0.68	0.48	10
4	F-2	不整形	1.34	0.64	22	21	F-15	楕円形	1.24	0.94	62
5	E-3	長方形	1.36	0.44	24	22	C-16	不整形	0.82	0.58	24
6	I-3	円形	2.02	1.88	120	23	E-17	不整形	1.72	0.30	24
7	G-4	楕円形	0.52	0.38	22	24	C-17	楕円形	1.04	0.64	39
8	H-4	不整形	0.78	0.74	16	25	C-17	不整形	0.70	0.34	14
9	I-4	不整形	1.22	1.08	14	26	E-17	不整形	0.74	0.44	18
10	J-4	楕円形	0.88	0.60	18	27	E-18	楕円形	0.82	0.62	20
11	J-5	長方形	1.38	0.56	22	28	D-19	円形	0.30	0.28	10
12	I-7	円形	1.12	1.08	56~	29	C-20	不整形	0.66	0.58	12
13	J-7	長方形	1.20	0.60	28	30	D-E-23	不整形	2.30	1.32	50
14	H-I-9	不整形	1.92	0.68	30	31	D-25	不整形	0.64	0.44	50
15	H-I-10	楕円形	0.66	0.44	26	32	B-27	不整形	1.10	0.76	20
16	F-10	不整形	0.54	0.36	56	33	B-28	円形	0.38	0.38	60
17	F-15	円形	1.08	1.06	6	34	C-D-28	不整形	2.70	1.80	84

線に平行する溝の痕跡からも推測できよう。

2号溝(第8図-B)は等高線に直交して東西に走る直線の溝である。調査区西端で深さ約30cmほどあるが、谷に向かって次第に浅くなり、ついには消滅する。壁面は北側の傾斜が緩やかである。後でみるように方形に区画する場合、包囲する内側の壁面の方が緩やかになることから、この溝も本来は北側に屈曲して方形に巡っていたのではないかと考えられる。なお覆土中から天目碗の破片が出土している。

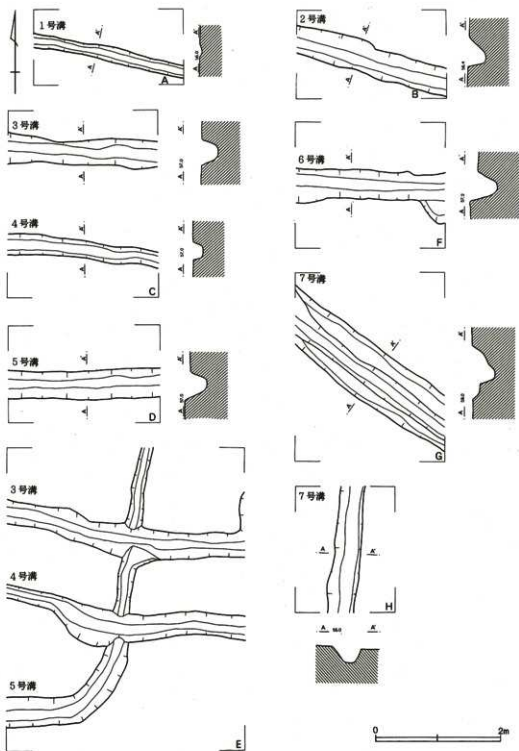
3・4号溝(第8図-C)はともに等高線に直交して東西に走る直線の溝で、ほぼ平行している。先端は若干北に屈曲して終わっている。3号溝は調査区西端で深さが約15cm、4号溝は約30cmである。

5号溝(第8図-D)は等高線に直交して伸びるが、調査区中程で北にほぼ直角に屈曲し、約6mで確認できなくなった。これは前述したように1号溝とつながって、方形に巡るのであろう。断面はU字形で、調査区西端での深さは30cmである。

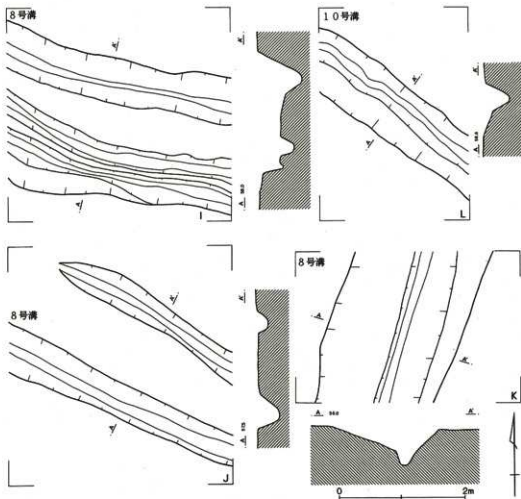
6号溝(第8図-F)は等高線に直交して真っすぐ伸び、先端はやや浅い谷が入りこんでいて、切られている。7号溝とつながると考えられる。断面はU字形で、調査区西端で最も深く約45cmである。

7号溝(第8図-G・H)は等高線に直交して、やや南に湾曲してから谷に向かって伸び、調査区東端近くで北にほぼ直角に屈曲する。6号溝とつながるものと考えられる。図で示したところは溝の両肩が少し段になっている部分であるが、全体的には方形区画の内側の壁面がやや緩やかな断面形

谷津遺跡



第8図 溝(1)



第9図 溝(2)

を成している。調査区西端で深さ約40cmである。

8号溝(第9図-I・J・K)はおおよそ「コ」字状に巡る溝である。北西部では大きな掘り方の中に3本の溝が掘られているが、調査区中央付近で2本の溝は消滅する。しかしさらに谷側になると溝の本筋は南に屈曲してまた東走するが、別の浅い溝が分岐して北東部の屈曲点で再び合流する。溝は調査区の東端付近を等高線と平行に走るが、北から12mほどで東にやや屈曲する。北東隅から約38mで再び西に屈曲する。調査区中央付近で二股に分かれているが、これは本筋の溝が一旦途切れて、再度途中から溝を掘り直したような状況である。本筋の溝の深さは北側で最大約70cm、東側谷部で最大50cm、南側で約40cmであり、断面形をみると区画の内側の壁面が外側の壁面よりも緩やかな傾斜を成しているのは、他の溝と共通する。また溝で囲まれた北東部に斜めに走る最大深約10cmほどの浅い溝が確認された。

9号溝は8号溝の区画内の調査区西端付近で確認された。わずかに屈曲点の付近のみで全体の形態は不明である。屈曲点はこの溝のようにほぼ直角に曲がるのではなく、緩やかな曲線を描いてい

る。また途中から枝分かれしているようであるが、調査区の西端に当たっていて、その性格はわからない。断面形はU字形を呈し深さは最大約20cm程で、溝幅は非常に狭いが掘り方はしっかりしている。

10号溝は調査区のもっとも南側で検出された「コ」字状の溝である。溝の本筋は調査区の西端から等高線に平行して北東方向に伸び、15mほどで等高線に直行する方向に直角に屈曲する。この屈曲点では別の浅い溝と合流する。本筋はさらに約14mで南西方向に屈曲するが、この角でも別の浅い短い溝が合流する。谷沿いに南西方向に伸びる溝は、約30mほどで谷の中に向かっていき、検出できなくなった。途中、井戸状の形態をもつ34号土坑に接している。土層の観察から34号土坑のほうが新しいようである。断面形はやはり区画内側の壁面は、傾斜が緩やかである。深さは最大で約30cmである。

(3) 出土遺物 (第10図)

遺構内から出土した遺物は非常に少ない。17号土坑からは「開通元宝」が出土したが、非常に脆弱な状態であった。19号土坑の覆土中からは縄文時代前期の諸磯式の土器片が2点(2・5)出土したが、前述したとおり土坑に伴うものではないと考える。

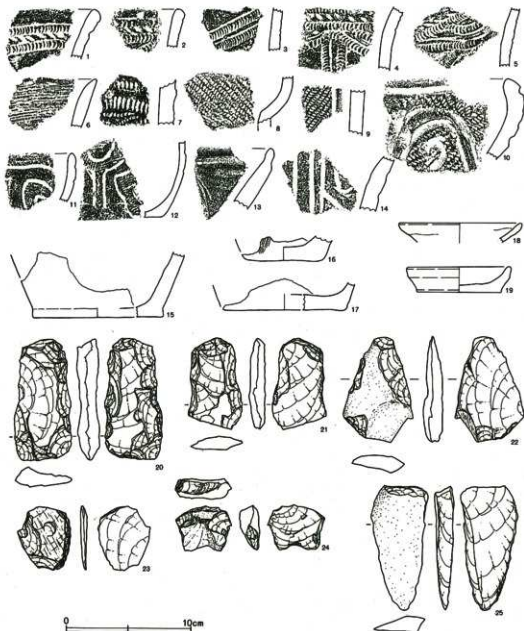
また溝2からは天目碗の小破片が出土した。胴部の一部分であり、両面茶褐色の釉が掛かって、下部では釉の掛からない地の部分もある。図化はできなかった。

遺構から出土した遺物は以上である。他はグリッドあるいは、第1次調査時の出土遺物、表採遺物である。

土器はいずれも破片資料なので詳細は不明であるが、一応次のように分類する。縄文前期：1～6、縄文中期：7～10・16・17、縄文後期：11～15、中世：18・19。

1～5は連続爪形文を施し、縄文時代前期の諸磯Ⅰ式に相当する深鉢の破片である。6は口唇部が次第に薄くなる形状で、口縁部に櫛歯状条線を横位に施文する。諸磯Ⅱ式に相当する。7はやや厚めの器壁に爪形文と刺突文を施し、縄文中期の勝坂式の特徴を示す。8・9は加曾利Ⅰ式とみられ、8は深鉢の頸部、9は胴部にあたる。10は加曾利Ⅲ式の深鉢の口縁部である。連続弧線文と蕨手状懸垂文の沈線を施す。11・12は同一個体で、器壁は薄く、J字文の変形した区画線内に充填縄文を施す。縄文後期称名寺式に相当する。13は口縁端部を摘みあげるように成形した口縁部で、14は縦の区画線を施す。いずれも堀之内式の深鉢である。底部は16・17が加曾利Ⅲ式に、15が堀之内式に該当するとみられる。18は中世の縁軸小皿で、口縁部に緑色の釉がかかる。19も中世の灯明皿の類である。

石器は打製石斧が2点(20・21)出土し、他は剃片類である。



第10図 出土遺物

第2表 谷津遺跡・石器計測表

期別	遺構	器種名	長 m	幅 m	厚 m	重 g	石材	期別	遺構	器種名	長 m	幅 m	厚 m	重 g	石材
10-20	グリッド	打製石片	9.7	4.6	1.8	90.7	砂岩	10-23	グリッド	剥片	5.2	4.2	0.5	10.0	88077x83
21	グリッド	打製石片	7.3	4.3	1.3	50.6	砂岩	24	グリッド	剥片	4.5	4.2	1.6	28.4	チャート
22	グリッド	剥片	8.3	5.6	1.5	64.7	88077x83	25	グリッド	剥片	9.9	4.6	1.6	70.0	88077x83

IV 二反田遺跡の調査

1 遺跡の概要

二反田遺跡は南小畔川の左岸に面した台地上に位置している。西から伸びるその台地は、調査区の中央南寄りに流れる水路によって開析された谷によって、舌状にとび出た形状を呈している。遺跡はその両方の舌状台地上にあって、いずれも二反田遺跡と称する。しかし後述するようにそれぞれの台地によって、遺跡の時期や性格が異なっているため、便宜上谷を挟んで調査区北側をⅠ区、南側をⅡ区として記述していく。なお塚は遺跡外に独立して存在したので、別途に項を設けた。

地形はⅠ区の中央付近で標高約60mぐらいで最も高く平坦面を成している。そこから北および南に向かって緩やかに傾斜しているが、南斜面の方がやや傾斜は強い。また南側の谷は西北方向に若干挟りこんでいて、現在もかなり湿っぽい状況である。調査区南端の標高は約55mなので比高差は約5mある。住居跡は南斜面に集中し、土坑は調査区全体に散在する感がある。

Ⅰ区では縄文時代中期(加曾井E式期)の竪穴式住居跡13軒、平安時代の竪穴式住居跡2軒、土坑41基、中・近世の溝5条が検出された。また調査区東側の三島神社の周辺が日高町教育委員会によって平成元年度に調査が行われ、奈良時代(8世紀初頭ころ)の竪穴式住居跡2軒が検出されている。縄文時代の集落跡は調査区の西側に広がる可能性が高い。

Ⅱ区は舌状台地の先端部に位置し、調査区の東側には田畑の水路が流れている。中央付近の平坦部は標高約56.5mで全体的に緩やかに傾斜し、その平坦部と谷との比高差は約2mほどである。

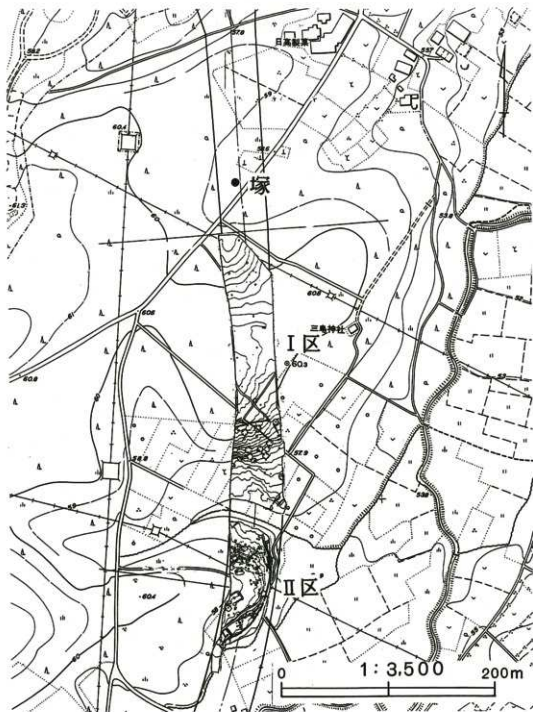
Ⅱ区で検出された遺構は縄文時代前期の竪穴式住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟以上、土坑32基、溝6条であり、遺物ではとくに鉄製品の鋳造にともなうスラグや炉壁が多量に出土しており、掘立柱建物跡が鋳造工房に関連する施設である可能性が高い。縄文時代の遺構は南側に集中し、鋳造関連の遺構は北側に集中する。Ⅰ区であれば多く出土した縄文時代中期の遺物はⅡ区ではわずかに表採できたにとどまり、谷を挟んだ両調査区の性格の相違が明確である。

塚はⅠ区よりもさらに北、市道を挟んで北側に道に面して位置する。ほぼ平坦な地形である。その塚の北東に隣接して「寛保元年」の年号や「豪弁」という人名が刻まれた石碑が建てられており、この塚の被葬者に関係するものであると推察された。墓域からは人骨とともに寛永通宝やガラス玉が出土している。

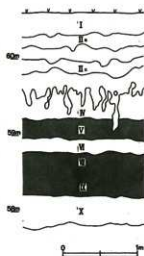
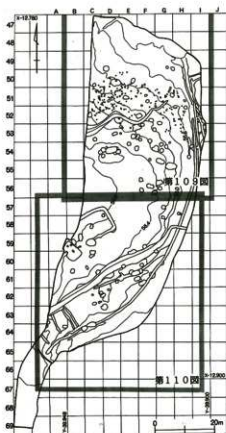
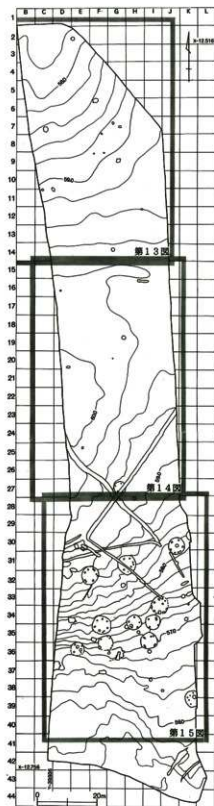
調査は座標軸を基準に6mグリッドを設定して、第12図のように名称を付けた。

調査面積は全体で14,300㎡である。

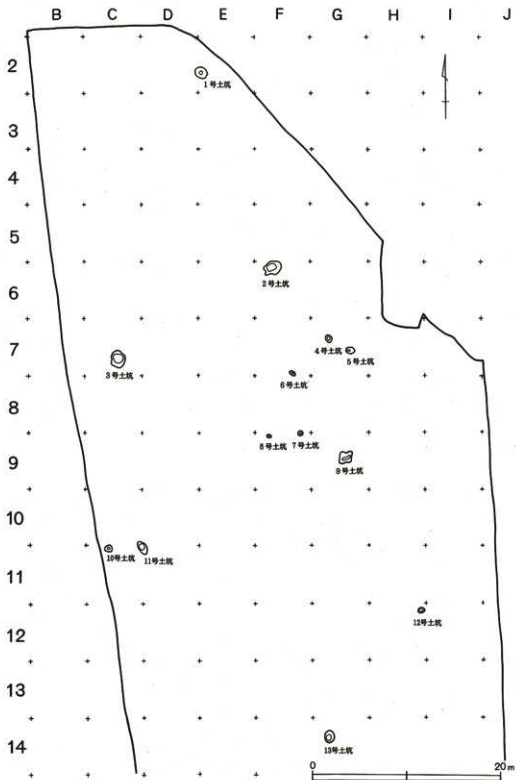
基本土層(第12図右下)はD-27グリッドで深掘りして、Ⅰ=表土、Ⅱ=黒褐色土(cは漸移層)、Ⅲ=ソフトローム、Ⅳ=ハードローム、Ⅴ=黒色帯(立川ローム第1黒色帯に相当)、Ⅵ=黄褐色ローム(ATのピークと考えられる)、Ⅶ~Ⅹ=黒色帯(立川ローム第2黒色帯に相当、境界は不明瞭)、Ⅺ=黄褐色ローム、と観察することができた。



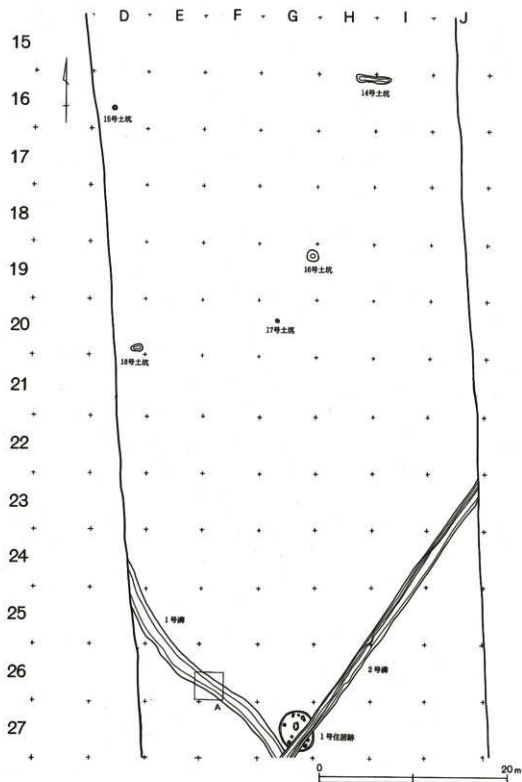
第11図 二反田遺跡周辺の地形



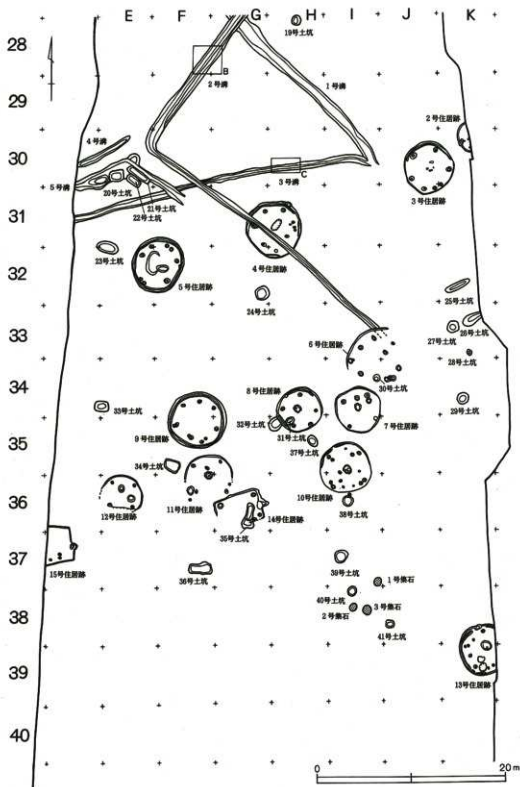
第12図 グリッド設定図と地形および基本土層



第13図 I区遺構全体図(1)



第14図 I区遺構全体図(2)



第15図 I区遺構全体図(3)

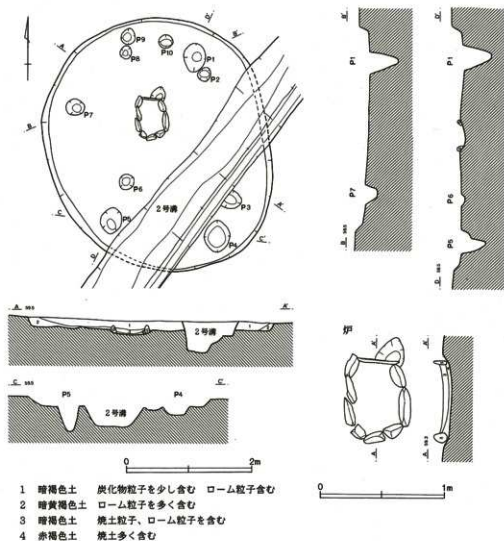
2 I 区の調査

(1) 縄文時代の住居跡と遺物

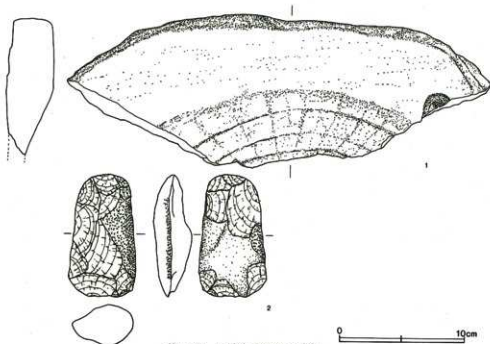
1号住居跡 (第16図)

G-27グリッドで検出され、この遺跡の住居跡のなかでは最も北に位置し、床面の標高も約59mともっとも高い。住居の東壁から南壁にかけて近世の溝によって切断されている。平面プランはやや南北に長い楕円形で、南北の長径が4.14m、東西の短径は3.54m、残存する深さは最大約17cmである。住居内ではピットが10基検出されたが、深さや位置からみてP1・5・7は支柱穴となるようである。壁溝は確認されなかった。規模は当遺跡内の住居で最も小さい。

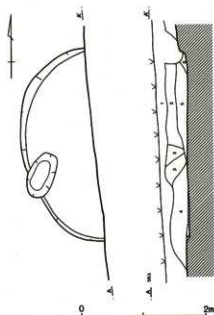
炉は石囲炉で床面中央のやや北側に設置されていた。掘り込みは南北に長い楕円形で、規模は長



第16図 1号住居跡



第17図 1号住居跡出土遺物



- 1 黒褐色土 腐食土（表土および擾乱）
- 2 黒褐色土
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子多く含む
- 4 黒褐色土 焼土、炭化物粒子含む
- 5 暗褐色土 ローム粒子含む
- 6 暗黄褐色土 ローム粒子多く含む

第18図 2号住居跡

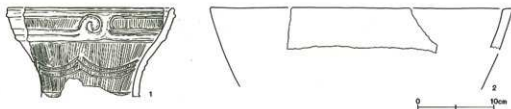
径0.70m×短径0.52m、最大の深さは約9cmである。炉縁石は掘りこみに沿って楕円形に配列していた。もっとも北の炉縁石には、片岩の石皿片が利用されている。埋設土器の痕は確認されなかった。炉床ではわずかに焼成の痕跡が認められた。

〔遺物〕（第17図）

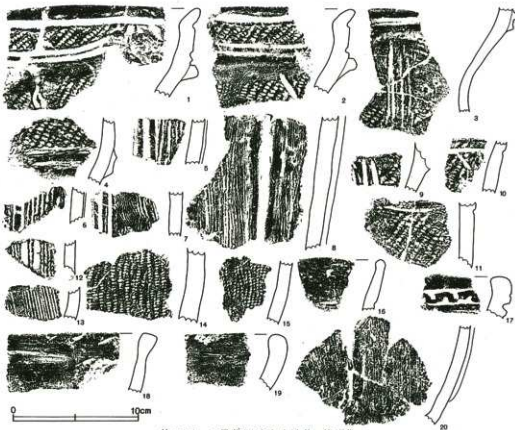
この住居では土器の出土数は少なく、10点ほどの破片が収集されただけであった。石器は1が炉縁石に利用された石皿で、平坦部に1箇所凹みがみられる。裏面は剝離のため失われていた。なお6号住居跡出土の石皿とは直接接合はしないが、大きさや石の材質からみて同一個体の可能性が考えられる。2は一部敲打痕のある打製石斧である。

2号住居跡（第18図）

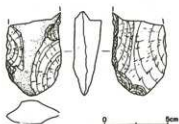
この住居跡はK-29・30グリッドで検出され、調査区の東端からわずかに1.2mほどの床面のみが確認された。残りは調査区外である。復元すると径は約3.6mのほぼ円形の住居になると考えられる。標高は約



第19図 2号住居跡出土遺物（土器）



第20図 2号住居跡出土遺物（拓影）



第21図 2号住居跡出土遺物（石器）

58.0mである。住居の西壁際に深さ30cmの土坑状の掘り込みがあるが、後世のもので住居に伴うものではない。柱穴や壁溝は確認することはできなかった。炉の形態や埋蔵の存在も不明である。

〔遺物〕（第19～21図）

出土遺物は少ない。第19図-1は弱キャリバー形を呈する土器である。頸部に連弧文を施す。口径21.7cm、現存高11.8cmである。口縁部文様帯は2本の低い隆帯で区画され、渦卷文を配

する。頸部には3本沈線の連弧文が8単位巡るようである。地文は細かい櫛歯状工具による条線文である。2は深鉢の無文の口縁部で、推定口径39.5cm、現存高5.5cmである。

第20図-1～15は加曾利E式の土器群である。1・2の口縁は同一個体である。口縁部文様帯は連弧状の隆帯で区画され、隆帯の下より蛇行沈線懸垂文がみられる。地文は単節RLの縦位施文である。3は頸部で、口縁部文様帯を区画する2本の隆帯と3本沈線の懸垂文がみられる。地文は単節RLの縦位施文である。4は口縁部文様帯の部分で、太い隆帯の中央に沈線を巡らす。5・6・8は隆帯懸垂文がみられるもので、地文は5・6が燃糸L、8は細かい櫛歯状工具による条線文を施す。9～11はいずれも単節RL縦位施文に沈線のみられる胴部の部分で、12は燃糸Lに2本沈線の懸垂文を施したものである。13～15は地文のみで、13は櫛歯状工具による条線、14・15は単節RLの斜位施文である。16・17は曾利系深鉢の口縁部で、16は無文の口縁を区画する沈線がみられ、17は2本の沈線の間に、交互に方向を変えた刺突文を施して波状の文様を成している。18・19は浅鉢の口縁部でいずれも無文である。20は深鉢底部付近の破片で、櫛歯状条線の地文に隆帯懸垂文が付く。

石器は片面に自然面を残した、粗製の打製石斧が1点出土した。

3号住居跡(第22図)

グリッドはJ-30・31、K-30・31で検出され、2号住居跡の西約2mに隣接して位置する。標高は58m前後である。平面はやや南北に長い円形で、長径5.63m、短径5.34m、深さは最も深いところで10cmほどである。床面はほぼ平坦であった。ピットは7基確認でき、位置と深さから主柱穴はP1・2・4・6・7になるものと考えられる。壁溝は北壁約半周が確認され最大幅22cm、最大深6cmであった。

炉は石囲土器埋設炉で、床面のほぼ中央に構築されている。掘り込みは北東方向にやや長い楕円形を成しており、規模は長径1.08m×短径0.98m、炉床の最大深さは約12cmである。石を配列する部分はさらにドーナツ状に最深7cmほど掘り窪めている。また土器を埋設するための円形の穴を15cm掘り込んでいる。炉縁石はほとんど抜き取られていた状況であった。石の配列は掘り込みと同じく、北東方向に長い楕円形であったろうと推定される。埋設土器は深鉢で、口縁は残存するが底部は抜いてある。炉の中央やや北寄りにあり、土器やその周辺の炉床は非常によく焼けている。

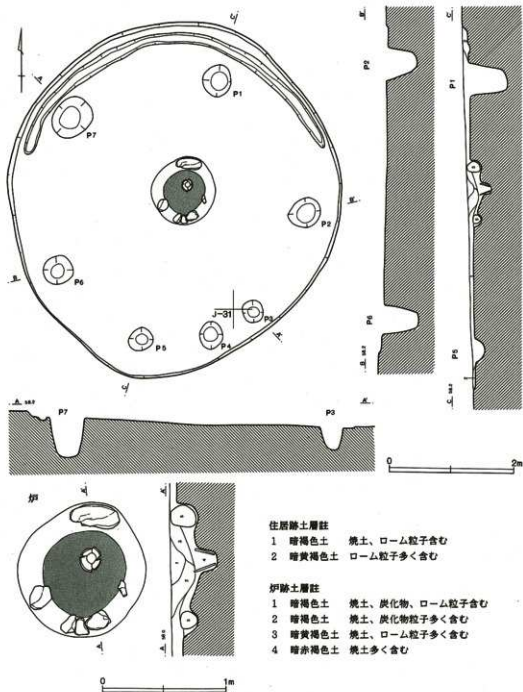
[遺物](第23・24図)

第23図-1は炉体土器である。口径16.3cm、現存高14.3cmで、かなり焼成を受けているため器壁がもろい。口縁部はラッパ状に外反して開き、ほぼまっすぐのびる。胴部は櫛歯状工具による条線文が全面に施文される。2は1と類似する形状を呈するが、口縁端部はやや内湾する。口径20.5cmで現存高12.9cm、地文は燃糸Lである。

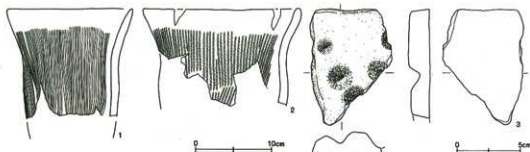
第24図-1は深鉢の口縁で口縁上端部隆帯下の文様帯内に条線を施す。2～4には蛇行する隆帯が付き、2・3は地文が燃糸L、4は櫛歯状工具による条線である。5は地文単節RLに、6は燃糸Lに区画沈線が施される。7・8は地文が単節RL縦位施文の胴部破片である。9は連弧文系土器の胴部で地文は細かい条線文である。10は曾利系深鉢の口縁部で2本の沈線の間に刺突文を巡ら

す。11は浅鉢の口縁部、12は地文がR L縦位施文の深鉢の口縁部、13は撚糸Lを地文とする深鉢の底部である。

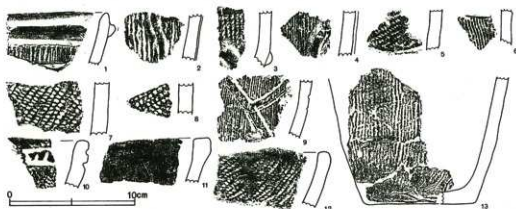
石器は多孔石が1点出土している。



第22図 3号住居跡



第23図 3号住居跡出土遺物



第24図 3号住居跡出土遺物 (拓影)

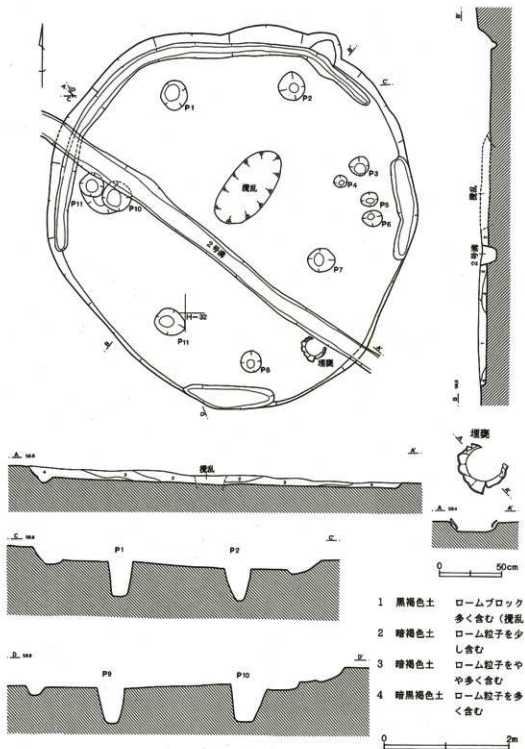
4号住居跡 (第25図)

G-31・32、H-31・32グリッドで確認された。なお1号住居跡を切断していたのと同じ2号溝が、この住居の中央部も切断していた。平面はやや南北に長いびつな円形を成しており、長径6.05m×短径5.93mで、深さは最大30cmほどである。床面はほぼ平坦である。ピットは11基確認し、P1～3、8・9・10は主柱穴になると考えられる。壁溝は西から北東にかけて約1/3周し、東壁や南壁の一部でも検出され、最大幅35cm、最大の深さ11cmほどである。

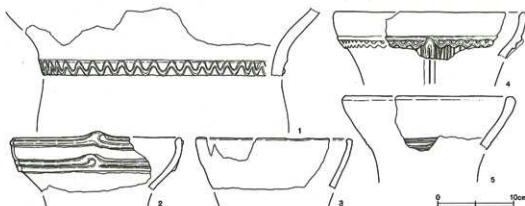
炉は検出されなかったが、床面の中央北寄りに長径1.3m×短径0.7mほどの攪乱穴があったので、おそらくはその場所に炉があったと考えられる。住居内埋塞は南壁付近で深さ8cmの掘り込み中に設置されていたが、2号溝によって約1/3ほど消失していた。土器は深鉢の頸部のみで、口縁部も胴部以下もなかった。

[遺物] (第26～28図)

第26図-1は埋塞の土器で、頸部径31.6cm、現存高8.3cmである。曾利系の大型深鉢の頸部的一部分のみである。頸部には低い隆帯を巡らした下に、蛇行状の隆帯を横方向に貼付する。2は加曾利E系のキャリパー形土器の口縁部で、推定口径21.8cm、現存高7.9cmである。口縁部文様帯は、退化した渦巻文を描きながら巡る2本の隆帯で区画され、口縁部上端の区画隆帯も上方に渦を巻くように盛り上がって、波状口縁となる部分がある。3は無文の小型深鉢の口縁部である。推定口径



第25図 4号住居跡



第26図 4号住居跡出土遺物（土器）

は20.3cm、現存高は6.8cmである。4は曾利系深鉢の口縁部であり、推定口径24.7cm、現存高6.3cmである。隆帯によって口縁部の無文帯が区画され、その下に蛇行状の隆帯を横に巡らし、2本の隆帯懸垂文が垂下する。地文は粗い櫛歯状工具による条線文である。5は無文帯が4本の沈線で区画される土器である。口径22.0cm、現存高7.2cmである。

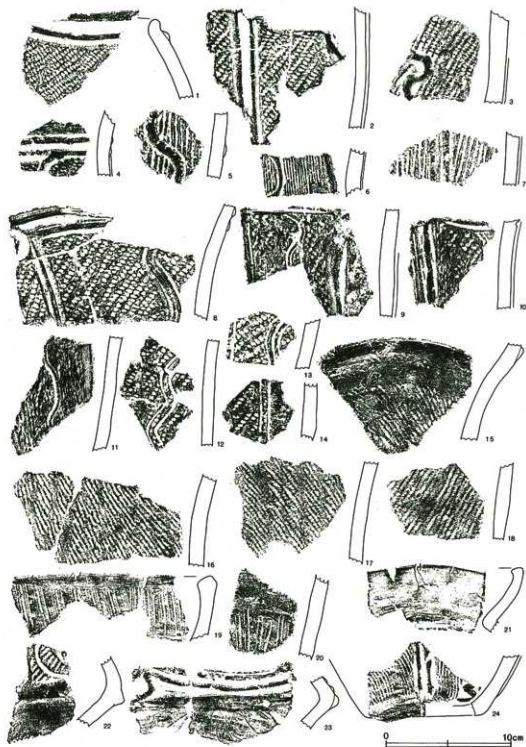
第27図-1～18は加曾利E式の深鉢である。1は口縁部が内傾する土器で、口縁上端部には隆帯を巡らし、地文は単節R Lの縦位施文である。2～4は地文が縄文で隆帯の懸垂文が垂下するもので地文はいずれも単節R L縦位施文である。5・7は地文撚糸Lに隆帯懸垂文が付き、6は条線の地文に隆帯懸垂文が付く。8は2本隆帯の区画文に沈線の懸垂文が垂下するもので、地文は単節R L縦位施文である。9～11は同一個体で、沈線の区画文に隆帯と沈線両者の懸垂文が共存し、地文はR Lの粗い縦位施文である。12～14は同一個体で、地文単節R L縦位施文に2ないし3本沈線の懸垂文が施される。15～17も同一個体で、地文は無節Lを縦位施文する。15は頸部にあたり、口縁部を区画する隆帯が巡らされる。

19は連弧文系土器の口縁部とみられるが、連弧文は認められない。21は曾利系深鉢の無文の口縁部で、頸部は大きく「く」字状に屈曲する。22・23は浅鉢の屈曲部で22は区画内に地文R L縦位施文を施して沈線で文様を描き、23は低い隆帯による円弧で構成される文様帯を形成する。24は深鉢底部で、撚糸Lに隆帯の懸垂文を付ける。

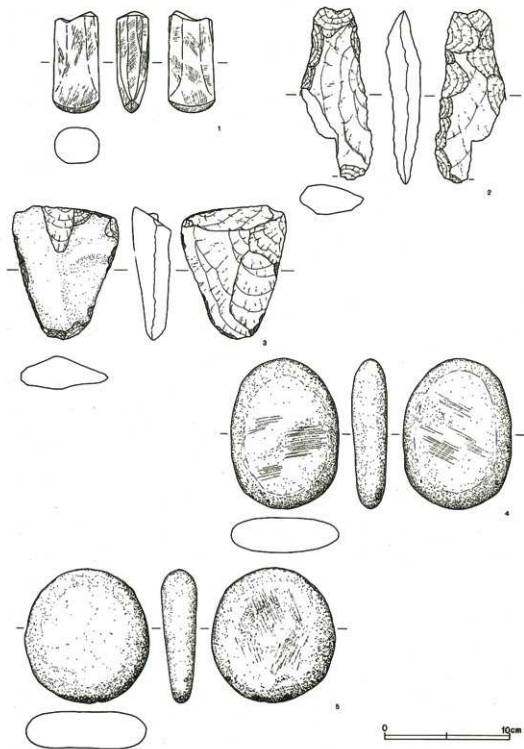
石器は磨製石斧が1点、打製石斧1点、磨石2点が出土した。

5号住居跡（第29図）

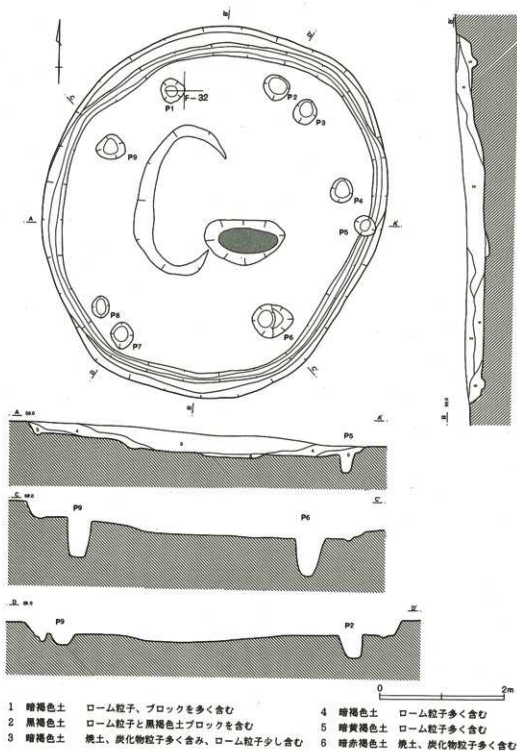
F-34・35、G-34・35グリッドで検出された。4号住居跡から西へ約7mに位置し、標高は約58.5mである。平面は南北にやや長い楕円形を成し、長径5.94m×短径5.49m、深35cmである。ピットを9基確認したが、かなり深いピットが2基並列しているところがあり、柱の建て替えが行なわれた可能性がある。壁溝は全周するが北壁と南壁付近では住居の掘り込みよりも若干内側に寄っている。壁溝の最大幅30cm、最大の深さは12cmである。床面は中央部で段を有し、住居の西側がブラットホーム状になって東側よりも20cmほど高くなっている。



第27図 4号住居跡出土遺物(拓影)



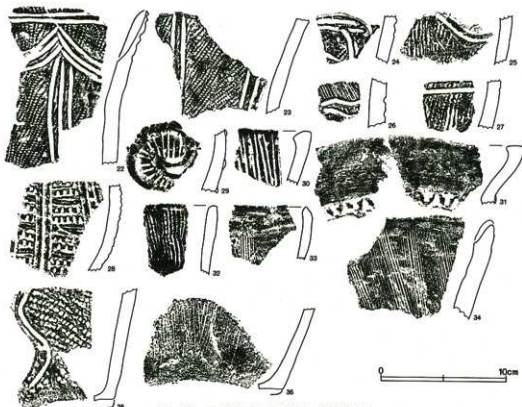
第28図 4号住居跡出土遺物（石器）



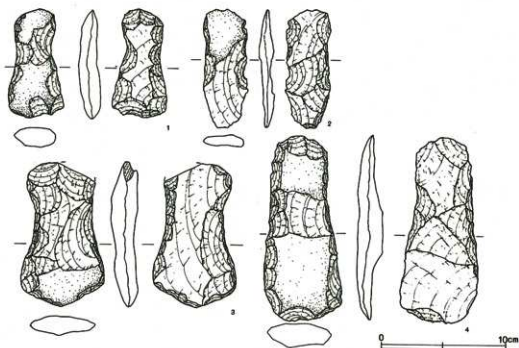
第29図 5号住居跡



第30図 5号住居跡出土遺物 (拓影) (1)



第31图 5号住居跡出土遺物 (拓影) (2)



第32图 5号住居跡出土遺物 (石器)

炉は中央やや南東寄りにある。現状では長径1.26m×短径0.71m、深さ5cmの東西に長い楕円形の掘り込みがあって、炉床面がよく焼けていた。石囲いや土器埋設の痕跡はみられなかった。

〔遺物〕(第30～32図)

第30図ー1～21は加曾利E式の土器群で、1～7は深鉢の口縁部である。1は口縁部文様帯を隆帯で区画し、区画内に短沈線を縦方向に充填する。胴部の地文は単節LR縦位施文である。2・3は同一個体で、隆帯によって楕円形の口縁部文様帯を区画している。口縁上端部には沈線を巡らし、縦位の沈線を充填する。胴部は燃糸Rを地文とする。4は波状口縁の突起部で隆帯による渦巻文がみられる。5は区画内に縦位の沈線が施される。6は櫛歯状条線が施される連弧文土器の可能性があり。7は隆帯で区画された楕円形の区画内に斜行する沈線を施し、湾曲する沈線による懸垂文がある。8～11は地文縄文に隆帯懸垂文が貼付されるものである。8・9、10・11はそれぞれ同一個体で地文はいずれも単節LR縦位施文である。12は燃糸Lの地文に隆帯の懸垂文が付くもの。13～15は同一個体で櫛歯状工具による条線の地文に隆帯の懸垂文がみられる。16は区画文の隆帯から隆帯懸垂文が垂下する。地文は粗い条線である。17は地文単節LRに沈線の蛇行懸垂文が施され、18は地文燃糸Rに2本沈線の懸垂文が、また19は櫛歯状条線の地文に沈線が施される。20・21は同一個体で条線がみられる。

第31図ー22～27は連弧文土器である。22・23は同一個体で、22は口縁部にあたる。連弧文は口縁部に1段巡り、連結部より懸垂文が垂下する。地文は単節LR斜位施文である。24～27は沈線の連弧文がみられるもので地文は24が単節LR縦位、25は燃糸L、26は斜行する細かい条線、27は燃糸Rである。28～31は曾利系土器群である。28は梯子状に沈線を施した後、横沈線間に刺突文を充填するものである。29は胴部の渦巻文、30は深鉢の口縁部で条線を施す。31は無文の口縁部が大きく開く形態の深鉢で、爪の先で上下交互に刺突を入れて蛇行状の文様を形成する。32～34は地文のみの深鉢の口縁部で、地文は32が燃糸L、33・34は条線が施される。35・36は深鉢底部にあたり、35は地文単節LR縦位施文に蛇行する沈線が、36は条線がみられる。

石器(第32図)は打製石斧が4点出土した。

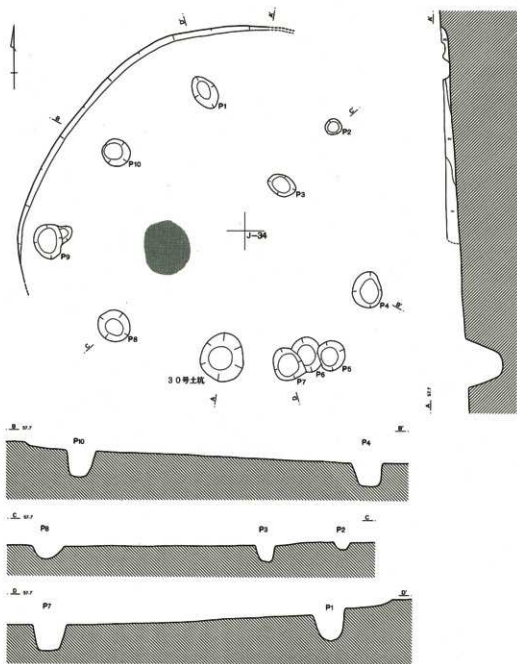
6号住居跡(第33図)

I-33・34、J-33・34グリッドで検出された。標高は約57.5m前後で4号住居跡とは約1.5mの比高差がある。この住居は調査確認面から床面まで浅かったので、平面の輪郭を明確にすることはできず、北から西に至る約1/4ほどを確認したにとどまる。復元すると径約6.0mの円形に近い形になるようである。床面ではピットが10基確認されたが、深さからみるとP1・4・6・7・9・10が主柱穴になりそうだが、並びが不整形なので確定できない。壁溝は確認できなかった。

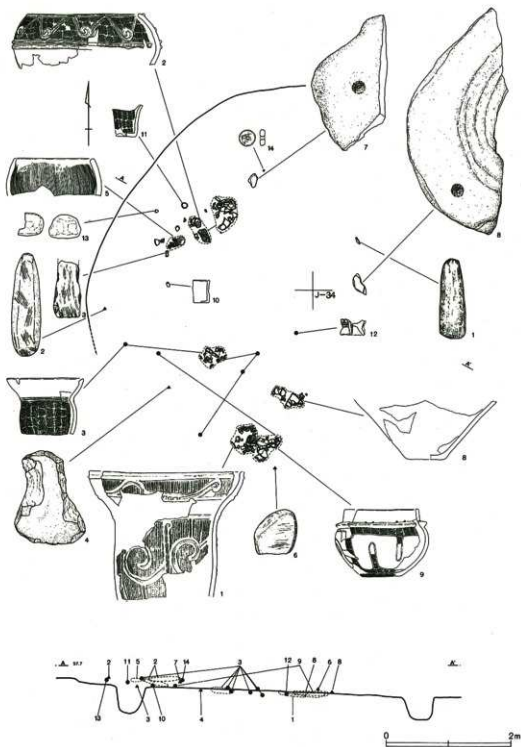
炉は地床炉で、中央やや西寄りで床面が赤く焼けた部分が確認された。南北に長い楕円形を呈し、長径0.84m×短径0.68mである。

〔遺物〕(第35～39図)

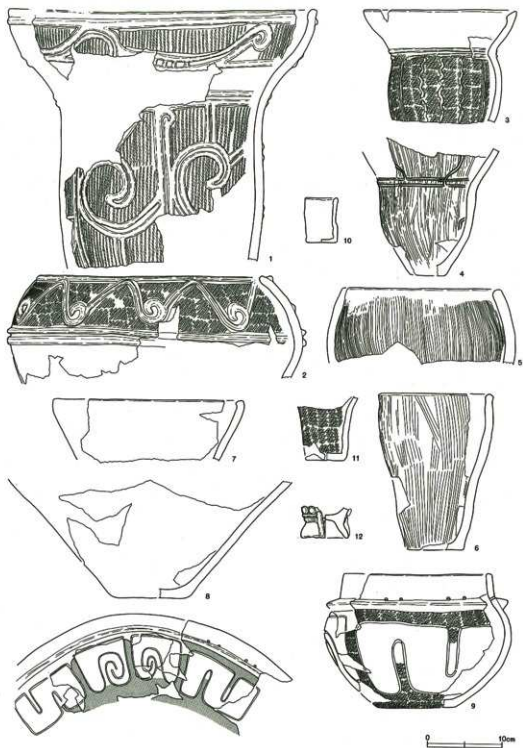
第35図ー1は頸部無文帯をもつキャリバー形の土器で、口径40.6cm、現存高34.5cmである。口縁部文様帯は2本の隆帯による渦巻文と区画文の組合せによる文様構成を持ち、2本の隆帯で無文帯



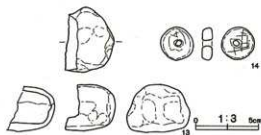
第33図 6号住居跡



第34図 6号住居跡遺物出土状況



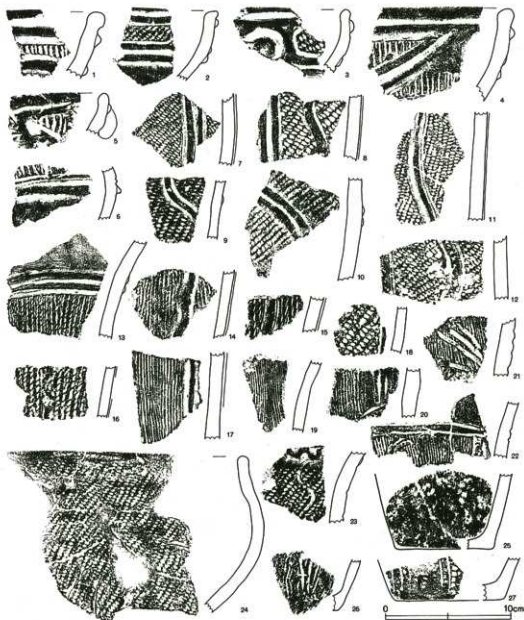
第35図 6号住居跡出土遺物（土器）



第36図 6号住居跡出土遺物(土製品)

を区画する。胴部は懸垂文と渦巻文からなるモチーフが連続して施される。地文は燃糸Lである。2は口縁が大きく内湾する鉢で、口径28.6cm、現存高14.5cmである。2本の隆帯によって文様帯が区画され、1本の隆帯を大きい波形と渦巻文を組み合わせて巡らし、主文様を構成している。地文はLRの横位施文である。3は曾利系土器で、無文の口縁部がやや内湾しながら開き、胴部は緩やかに膨らむ形態を示し、口径20.2cm、現存高14.6cmである。無文帯を区画する2本の隆帯の下に、2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が施される。地文はRL縦位施文である。4は連弧文系の土器であるが、口縁部は残存していない。頸部径は13.6cm、現存高は18.2cmである。頸部が竹管状工具による平行沈線にて区画され、そこから上方には同じ工具による蛇行沈線懸垂文が施される。地文は粗い条線である。5は口縁部が内湾する深鉢で、口径20.8cm、現存高10.1cm、地文は橢圓状工具による条線である。6は口縁部がわずかに開くだけの深鉢で、全面に浅い橢圓状工具の条線を施す。口径14.4cm、高さ20.7cmである。7は無文の口縁部で口径25.5cm、現存高8.5cmである。8は無文浅鉢の底部付近で底径は9.3cmである。9は有孔罎付土器で、口径19.6cm、罎径24.1cm、底径10.2cm、高さ17.8cmである。無文の口縁部はやや内傾してまっすぐ伸び、罎は断面三角形を呈する。罎の上部と口縁部の接点には、2個1組で土器の内側に向かって斜めに孔が貫通している。胴部は大きく膨らむ形態を示し、1本の沈線によって一筆がきの「四」字状の文様が2区と、1対の渦巻文をもつ文様が1区あり、それらの文様の空隙には単節RLの充填縄文がすべて縦位に施されている。10は無文小型のコップ状の土器で、口径4.0cm、高さ6.0cmである。11は小型の深鉢の底部付近で、底径は4.9cm、現存高は8.3cm、地文は単節RL縦位施文である。12は小型の脚部で、2本隆帯の区画文と粘土粒による円形の貼付文様、短隆帯による分割文がみられる。13はいわゆる土鈴で半分だけ残存する。手づくねの粗い作りで、2個の皿状にした粘土を接合して成形した痕跡がみられた。14は有孔土製円板で、直径2.6cm、厚さ0.7cmである。

第37図-1～19は加曾利E式土器群である。1～6は深鉢の口縁部で、1は文様帯に縦位の沈線が充填され、2は頸部無文帯をもち区画文に単節LR横位施文がみられる。3は渦巻文の部分にあたり、地文は単節LR横位施文。4は2本隆帯による渦巻文の端部で、地文は燃糸Lである。5は渦巻文が突出するもので、地文は条線である。6は頸部無文帯と口縁部を区画する隆帯部分で、地文は燃糸Lである。7～11は隆帯の懸垂文が貼付されるもので、いずれも地文は単節RLの縦位施文である。12・18は単節RLの地文上に半截竹管状の工具で懸垂文を描いたものである。13は頸部文様帯を区画する2本隆帯下胴部に燃糸Lの地文を施す。14～16は燃糸L、17は橢圓状条線の地文

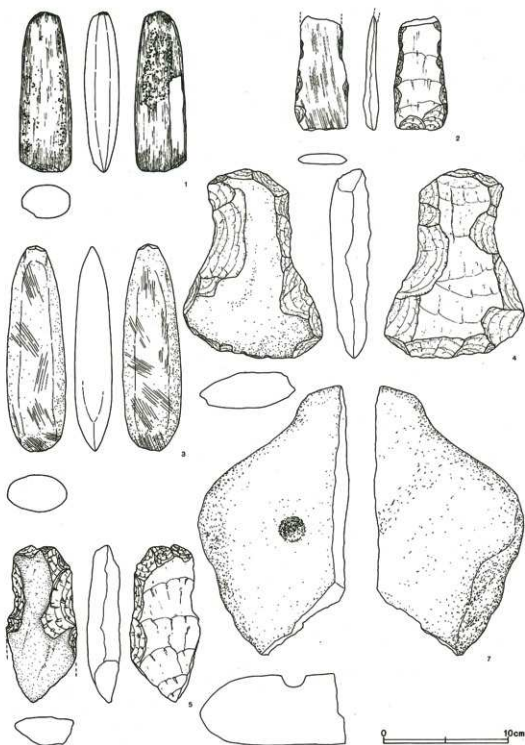


第37図 6号住居跡出土遺物(拓影)

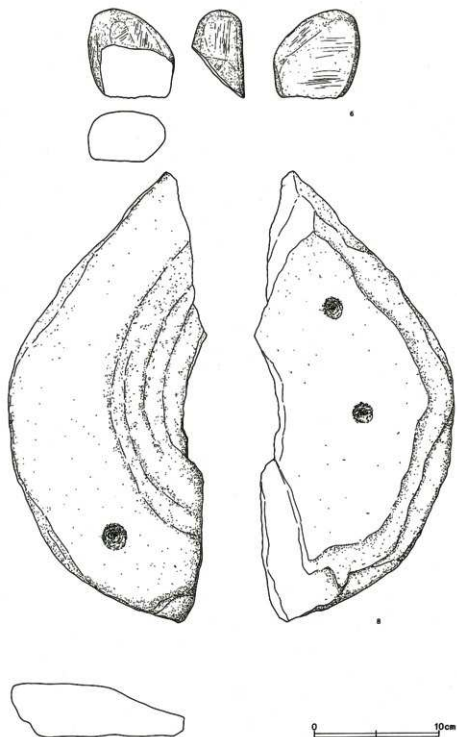
上に隆帯を貼付するものである。19は櫛歯状条線の地文のみの破片である。

20～22は連弧文系土器でいずれも櫛歯状工具による条線の地文に、沈線で連弧文等を描くようである。23は曾利系深鉢で頸部に波状隆帯を巡らし、沈線で蛇行懸垂文を入れる。地文は単節R Lを縦位施文する。24は鉢の口縁部で地文が単節R L縦位施文のみで、他に文様はない。25～27は深鉢底部で、25は地文がみられず、26は燃糸Lを、27は単節R Lを地文としている。

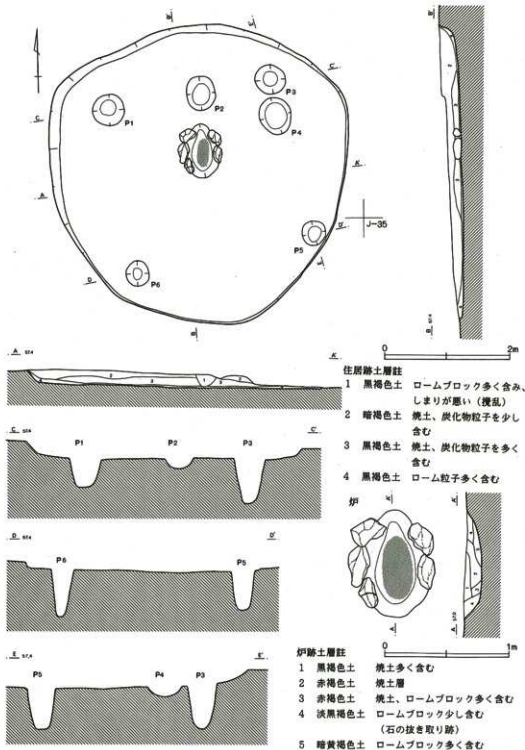
石器は磨製石斧2点、打製石斧3点、凹石1点、磨石1点、石皿1点が出土した。



第38図 6号住居跡出土遺物（石器）(1)



第39図 6号住居跡出土遺物（石器）（2）



第40図 7号住居跡

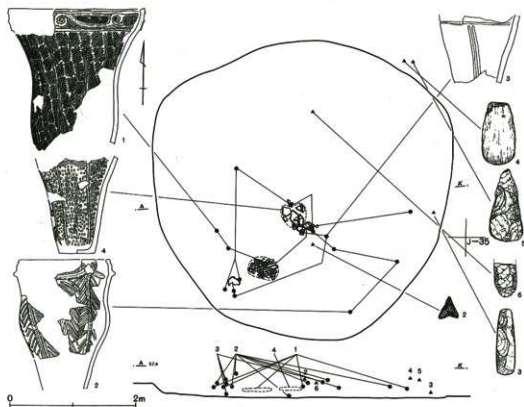
7号住居跡 (第40図)

I-34・35グリッドで6、8、10号住居跡とそれぞれ1mほどの間隔を置いて検出された。標高は約57m前後で、6号住居跡とは約50cmの比高差がある。住居南側は確認面から浅かったため壁の立ち上がりは僅かであった。平面はほぼ円形で、南北径4.72m、東西径4.78m、深さは最大22cmで床面は平坦である。床面ではピットが6基確認できたが、このうち主柱穴は深さからみて、P1・3・5・6となろう。壁溝は検出されなかった。

炉は石囲炉で床面中央部のやや北寄りに作られている。掘り込みは南北に長い楕円形で、長径0.84m、短径0.52mである。炉縁石は5個が残存していて、他は抜き取られていた。おそらくあと3〜4個の石があったと考えられる。炉床は全面的によく焼けていた。

[遺物] (第42〜45図)

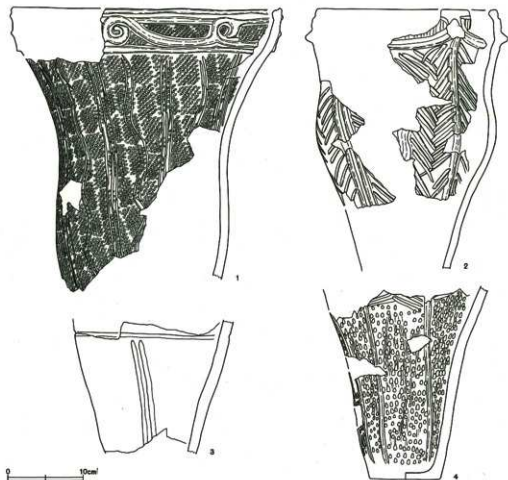
第42図-1はキャリバー形土器で、口径35.8cm、現存高37.6cmである。口縁部文様帯は1本の隆帯で区画され、1本の隆帯による渦巻文を主体とした文様構成をもつ。胴部には3本沈線の懸垂文と2本沈線の蛇行懸垂文が交互に施されている。地文は複節RLR縦位施文である。2は曾利系深鉢で、推定口径は24.0cm、現存高は34.2cmである。口縁部には1本隆帯と沈線によって楕円形区画文をつくり、文様間には縦方向の短沈線を充填させる。胴部は1本隆帯と2本隆帯を交互に配した懸垂文を施し、懸垂文間には矢羽状に短沈線を施文する。3は口縁が緩やかに開く形態の深鉢と思



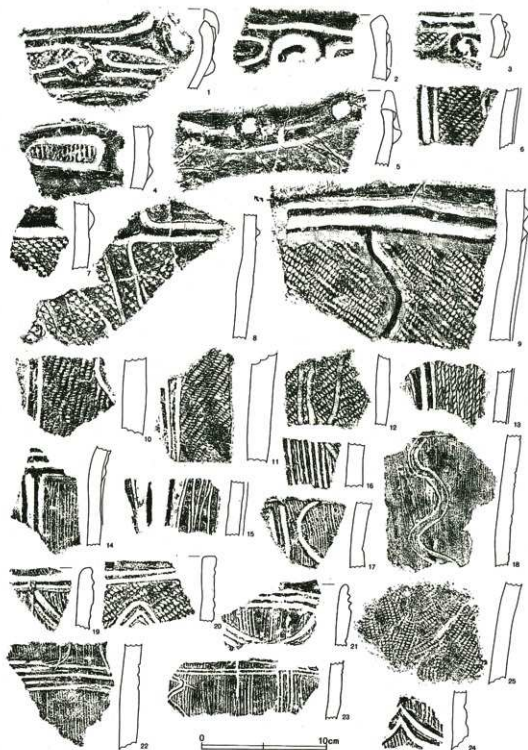
第41図 7号住居跡遺物出土状況

われ、胴部のみが残存する。現存高は17.5cmである。指で成形した後に、1本沈線の区画文と2本沈線の懸垂文を施す。4は曾利系深鉢の胴部と底部で底径は9.2cm、現存高は25.2cmである。1本隆帯の懸垂文が8単位施され、懸垂文間に頸部は短沈線を矢羽状に施し、また胴部は水滴形の刺突文を充填させている。刺突文は重複関係からみて基本的の下から上へ向って施文されているようである。地文は櫛歯状工具による浅い条線文である。

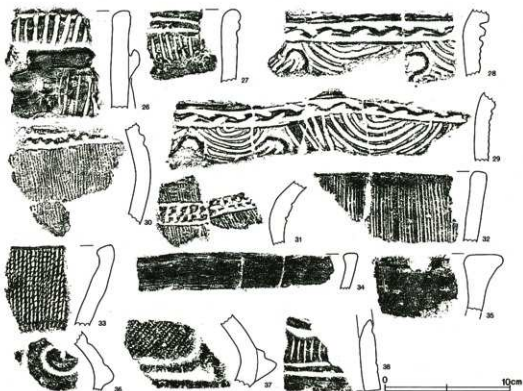
第43図-1~18は加曾利E式土器群で、1~5は深鉢の口縁部である。1は頸部無文帯をもち、波状口縁を有して、波の部分には渦巻文を施す。文様帯には隆帯による渦巻文を主体とした文様がみられる。地文は単節LRを横位施文する。2・3は口縁部文様帯に渦巻文をもつもので、2には地文がみられず、3は単節LRの横位施文である。4には頸部無文帯があり楕円形区画内には燃糸Lが施される。5は波状口縁をもち口縁部には渦巻文崩れの、円形の文様を隆帯で表している。6は単節RLの地文に隆帯懸垂文が、7は複節LRに隆帯区画文が付く。8は2と同一個体で口縁部文様帯を区画する隆帯と、その下位に沈線による懸垂文みられる。沈線間は地文を簡単に撫で消している。地文は胴部には複節LRが施され、口縁部文様帯内にはみられない。9は頸部無文



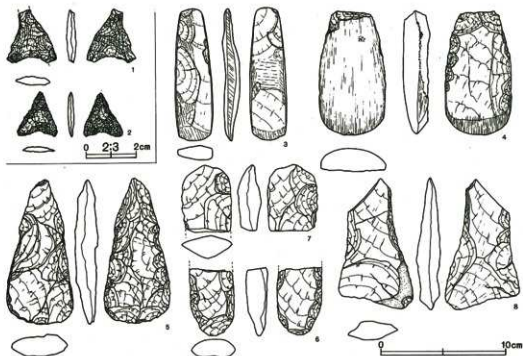
第42図 7号住居跡出土遺物（土器）



第43図 7号住居跡出土遺物 (拓影) (1)



第44図 7号住居跡出土遺物 (拓影) (2)



第45図 7号住居跡出土遺物 (石器)

帯を区画する隆帯下に蛇行状隆帯を垂下させる。地文は単節L R縦位施文である。10～12は地文単節R Lに沈線の懸垂文がつくもので、10・11は同一個体である。13は燃糸Lの地文に、14・15は地文条線に隆帯が貼付される。16は燃糸Lに沈線が、17・18は櫛歯状条線に沈線が施される。

19～24は連瓦文土器である。地文は20が単節R L、24が燃糸Lの他はすべて条線である。第44図一26～31は曾利系土器群である。26は口縁部に断面J字形の隆帯を巡らし、口縁端部に短沈線を縦位に施す、非常に粗い作りの土器である。28・29は同一個体で深鉢の頸部にあたる。2本の沈線間に上下交互に斜め方向からの刺突文を施して、蛇行状の文様を形成する。その下位には沈線による半円形の渦巻文を巡らす。30・31も同様に2本ないし3本の沈線を巡らせた後で刺突文を施している。地文は条線である。32・33は地文のみの深鉢口縁部で、32は櫛歯状工具による条線、33は燃糸Lを地文とする。34・35は無文口縁。36・37は浅鉢の文様帯部で、36では渦巻文がみられ、37では楕円形区画内に地文単節R Lが縦位に施される。38は器台の底部で、器壁にはおそらく円形の透孔を有する。底部には2本の沈線が巡り、透孔に沿って沈線が施されるようである。その沈線の空隙には縦方向の短沈線が施文される。

石器（第45図）は石鏃が2点、磨製石斧が2点、打製石斧が3点出土した。

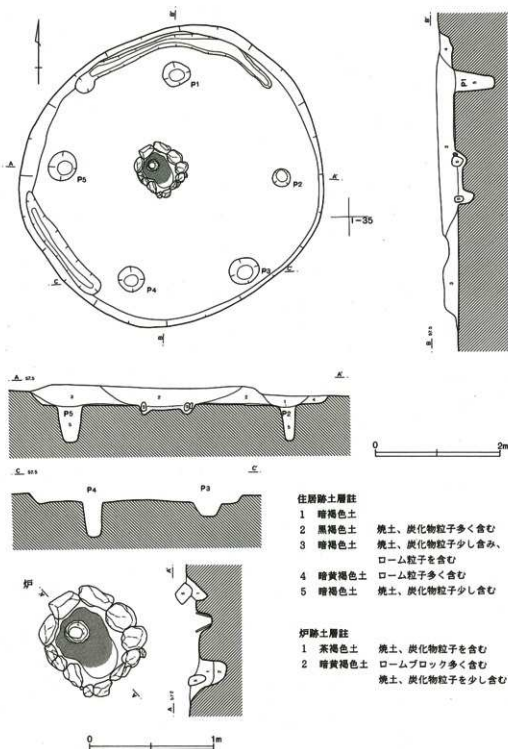
8号住居跡（第46図）

H-34・35グリッドで検出された。標高は約57m前後で7号住居跡とほぼ同じ高さで並列している。平面はほぼ円形で南北径4.74m、東西径4.91m、深さは最大15cmで、床面は平坦である。ピットは5基検出され、P3のみ若干浅いがすべて主柱穴となるようである。壁溝は北壁で約1/4周と南西壁で約1/8周が確認された。最大幅30cm、最大深さ5cmであった。

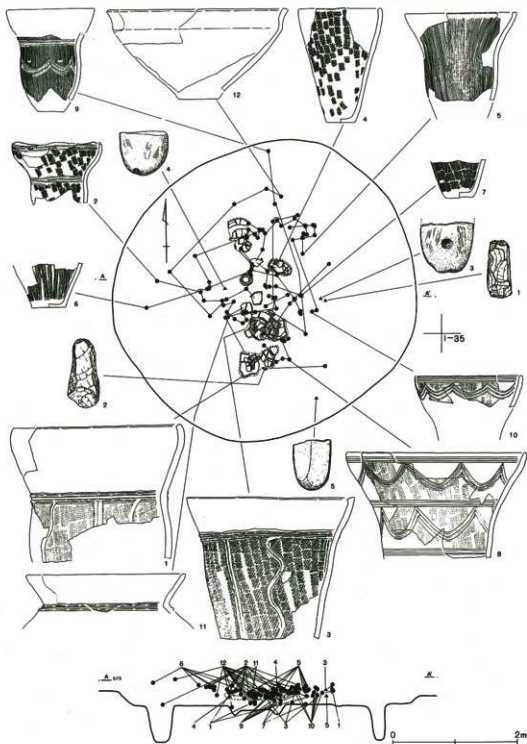
炉は石囲土器埋設炉で床面の中央やや西寄りに作られている。掘り込みは北西方向に長い楕円形で、長径0.95m、短径0.78mである。ドーナツ状に最大約30cmほど深く掘り込んだところに炉縁石を巡らし、炉床北寄りに深さ15cmほどの穴の中に土器を埋設した（埋設土器は調査中に盗難に遭ったため、土器の形状は不明である）。

〔遺物〕（第48～53図）

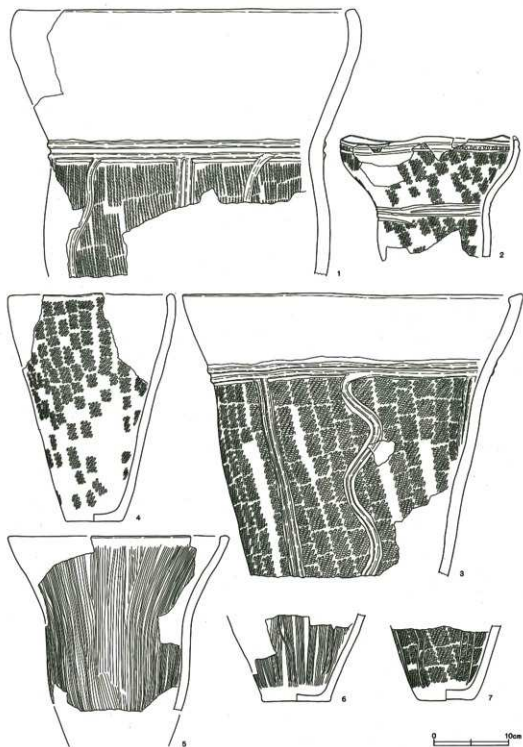
第48図-1は口縁部が弱いキャリバー形に開き、胴部はやや膨らむ形態を示す深鉢で、口径44.6cm、現存高30.5cmである。2本隆帯で口縁部無文帯を区画し、2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文が交互に配される。地文は燃糸Lである。2は口縁部が内湾しながら開く形態で、口縁部がゆるやかな4単位の波状を呈する。口径23.0cm、現存高16.0cmである。口縁部は2本沈線の間に刺突文をめぐらせ、くびれ部には3本沈線による区画がみられる。地文は単節R Lの粗い縦位施文である。3は口縁部がわずかに内湾して開き、胴部はほぼ直線を成す大型の深鉢で、口径45.4cmで現存高37.5cmである。2本隆帯で口縁部無文帯を区画し、2本隆帯の懸垂文と1本隆帯の蛇行懸垂文を交互に配する。地文は単節R Lの縦位施文である。4は胴部がほぼ直線に開き、口縁部のみが若干内湾する形態の深鉢で、口径21.5cm、高さ30.0cmである。地文は単節R Lの粗い縦位施文である。5は口縁部が大きく開き、胴部がなめらかに湾曲する形態の深鉢で、推定口径29.0cm、現存高23.3cmを測る。地文は櫛歯状工具による条線文である。



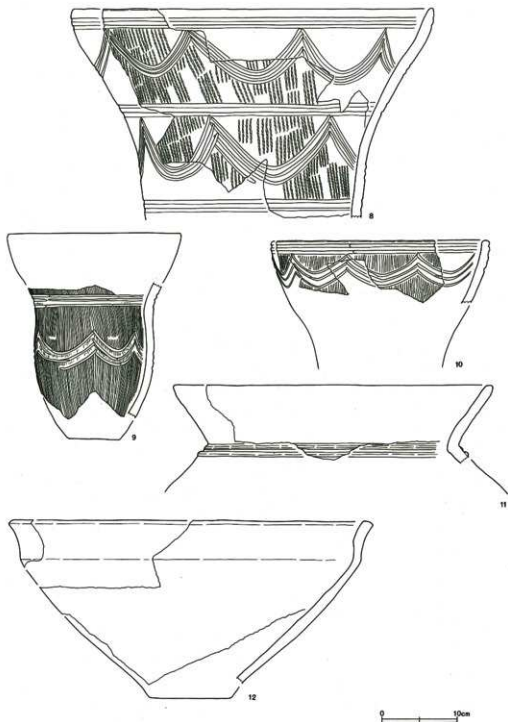
第46図 8号住居跡



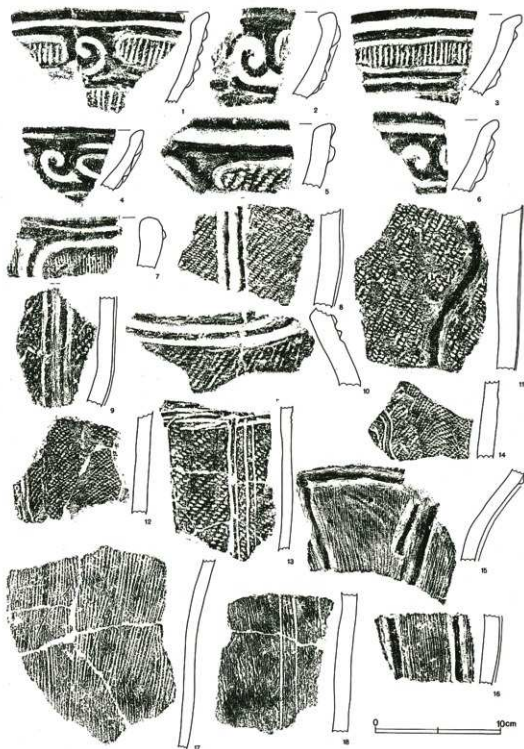
第47図 8号住居跡遺物出土状況



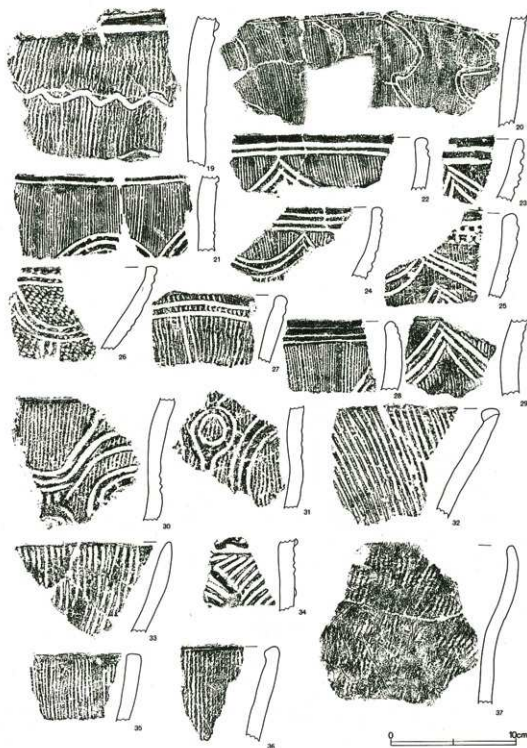
第48図 8号住居跡出土遺物（土器）(1)



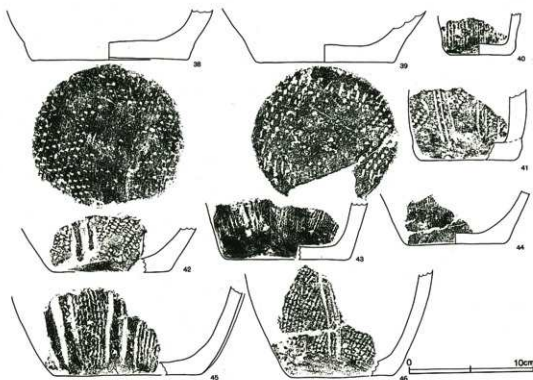
第49図 8号住居跡出土遺物（土器）(2)



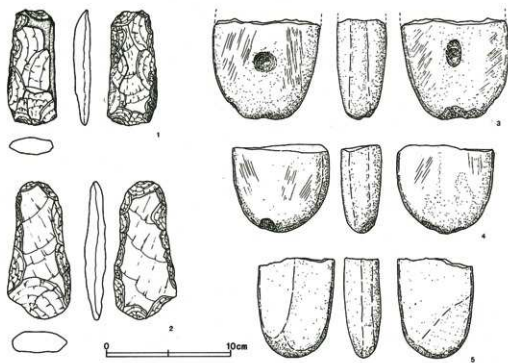
第50図 8号住居跡出土遺物(拓影)(1)



第51図 8号住居跡出土遺物 (拓影) (2)



第52図 8号住居跡出土遺物 (拓影) (3)



第53図 8号住居跡出土遺物 (石器)

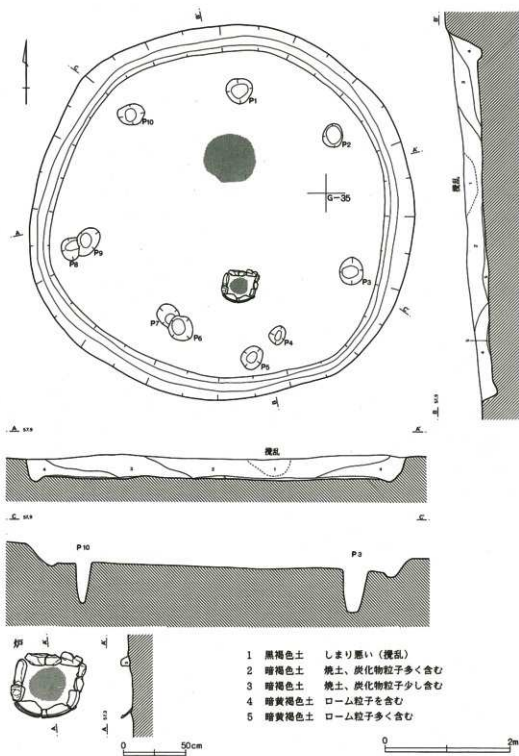
8・9・10は連弧文土器である。8は口縁部、頸部、胴部にそれぞれ2本沈線を巡らして文様帯を区画する。口縁部と頸部にはそれぞれ3本沈線を基本とする連弧文を1段ずつ施すが、おそらく胴部下半にも連弧文が描かれていたと思われる。地文は燃糸Lを粗く施文する。推定口径48.0cm、現存高27.8cmと大型である。9は胴部のみが残存する。頸部に3本沈線を巡らし、胴部には3本沈線の連弧文を1段6単位描く。口縁部にも連弧文が巡らされていたと考えられる。地文は櫛歯状工具による条線を施す。10は口縁部のみで、推定口径は28.8cm、現存高は8.2cmである。口縁部上端部に2本沈線を巡らし、その下に3本沈線の連弧文を施す。11・12は浅鉢である。

第50図-1~17は加曽利E式土器群である。1~7は深鉢の口縁部で、3・7以外は文様帯に渦巻文がみられる。地文は1・3が燃糸L、5が単節LR横位施文、7が櫛歯状工具による条線である。8・9・11は地文単節RLに隆帯の懸垂文を貼付するものである。10は頸部で大きく屈曲する形態を示す鉢の頸部で、2本の隆帯区画文が巡る。地文は単節RLを縦位施文する。12~14はいずれも地文が単節RLに沈線の懸垂文・区画文が施されるもの、15・16は同一個体で条線の地文に隆帯の懸垂文・区画文が貼付されるものである。18は細かい条線に沈線の懸垂文を施文するもの、17は条線の地文のみの胴部破片である。

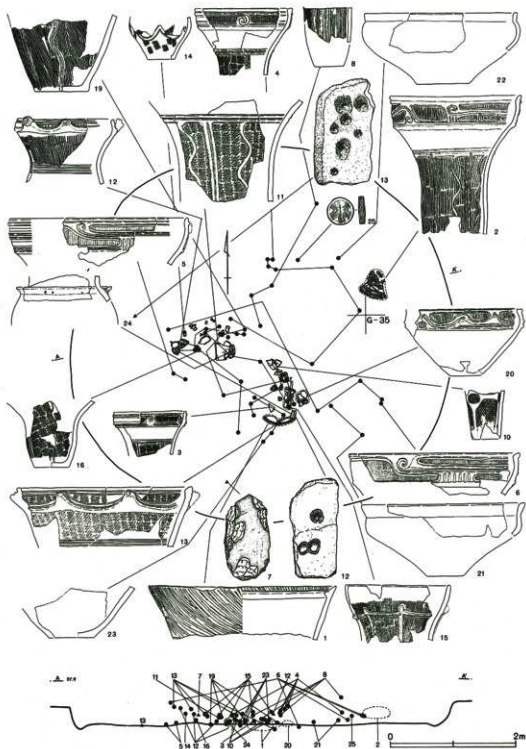
第51図-19~31は連弧文系土器群である。19は区画文隆帯下位に1本沈線で波形を描き、その下に連弧文を施す。地文は燃糸Lである。20は沈線の区画文から2本沈線による蛇行状懸垂文を垂下させる。地文は条線である。22~28は口縁部で3本沈線の連弧文を描く。地文は26が単節RL、27が燃糸Lの他はすべて櫛歯状工具による条線である。30・31は同一個体となり、胴部に連弧文と渦巻文が組み合わさって変形した文様を施す。地文は燃糸Lである。32・34は曾利系の土器群で、32は口縁部に斜位の集合沈線を施すもの、34は隆帯の蛇行状懸垂文間に斜行する短沈線を充填するものである。33・35~37は地文のみの深鉢口縁部で、33・36は燃糸Lを、35は櫛歯状工具の条線を、37は無節Rを地文とする。38~46は深鉢底部で38・39の底部裏面には網代圧痕が残る。地文は38・41・42・46が単節RL、43・45が燃糸L、39・40・44が条線で、42・45には2本隆帯の懸垂文を貼付する。

9号住居跡（第54図）

F-34・35、G-34・35グリッドで検出された。標高は約57.2mで7・8号住居跡とほぼ並列しており、8号住居跡からは約6mほど隔たっている。平面はほぼ円形で、南北径5.98m、東西径6.15m、最大深さは約55cmであり、当遺跡のなかでも最も残存状況が良好で、また大規模な住居である。床面は平坦である。ピットは10基検出されたが、深さからみてP1・2・3・6・9・10が主柱穴になるようである。P7・8はそれぞれ柱の抜き取り穴である可能性もある。壁溝は全周し、最大幅30cm、最大深さ12cmとほかの住居に比べてあらゆる点で規模が大きいのことがわかる。炉は2ヵ所確認された。一つは地床炉で床面の中央部北寄りにあり、まったく掘り窪めた様子はなく、平坦な床面がよく焼けていた。もう一つは床面に掘り込むことなく、そのまま石と深鉢の口縁部を並べているもので、床面中央部の南寄りに作られている。この炉は平面が長方形になるように石と土器を並べるが、南側だけを土器で囲っている。炉床面はよく焼けていた。



第54図 9号住居跡



第55图 9号住居跡遺物出土状況